大阪府茨木市

平成15年度発掘調査概報

平成16年3月

茨木市教育委員会

巻頭図版Ⅰ

東奈良遺跡　第２遺構面　全景（南から）

東奈良遺跡　最終遺構面　全景（北から）

本文30P～

巻頭図版Ⅱ

東奈良遺跡　調査地遠景（北東から）

東奈良遺跡　環濠（北東から）

本文54P～

はじめに

茨木市は、大阪府の北部の北摂に位置していて山地部の北部は京都府に接し、南北17.05㎞・東西10.07㎞と南北に長い市域となっています。淀川に向かってなだらかに下る南部には古くから人が住み、遺跡も数多くみられます。

特に、国の重要文化財に指定された銅鐸の鋳造鋳型等が出土し、平成11年には土地区画整理事業に伴う都市計画道路と区画道路の発掘調査では小銅鐸の出土した環濠集落跡である東奈良遺跡や市指定有形文化財の人面付土器の出土した目垣遺跡など著名な遺跡がみられました。

大規模な開発である北部丘陵地域の彩都も一部入居がはじまり、南部の市街地内でも共同住宅の建設等が大幅に進みつつあり、平成15年に入り益々その速度を速めているようにみられます。

それらの開発に伴い、昔の人々の暮らしの様子を示す痕跡が破壊される場合、その記録を保存するためにやむを得ない措置として発掘調査を事業者のご協力を得て実施しているものです。

この冊子は、平成15年度に行った開発等に伴う緊急発掘調査について、その概略について記したものです。

調査にあたって、ご協力をいただいた事業者の方やご関係の皆様にお礼を述べますとともに、今後とも本市の埋蔵文化財の保護と保存等により一層の温かいご理解とお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

平成16年３月31日

茨木市教育委員会
教育長　　大　橋　忠　雄

目　　次

はじめに

例　　言 …… 1

茨木市遺跡分布図 …… 3

平成15年度埋蔵文化財発掘調査一覧表 …… 4

1．葦分神社東方遺跡（新和町地内） …… 5

2．東奈良遺跡（天王一丁目地内） ……18

3．春日遺跡（上穂積一丁目198他） ……20

4．総持寺遺跡（総持寺一丁目789－1） ……26

5．東奈良遺跡（東奈良三丁目391－1） ……30

6．春日遺跡（西田中町285－1・286） ……37

7．中条小学校遺跡（新中条町55－1・57－1・57－2） ……42

8．東奈良遺跡（東奈良三丁目地内） ……54

9．牟礼遺跡（舟木町373－3・5・6） ……59

10．目垣遺跡（目垣三丁目244－3） ……63

11．目垣遺跡（目垣三丁目135－1・2） ……65

例　　言

1．この概報は、茨木市教育委員会が平成15年度に実施した発掘調査事業報告です。

2．本書に使用した地図は「茨木市地域計画図－1／2,500」です。

平成15年度 埋蔵文化財発掘調査事業の概要

1．平成15年度発掘調査事業

茨木市における平成15年度の発掘件数は９件で、埋蔵文化財確認試掘･立会調査件数は187件ありました。発掘調査原因の事業別件数は、民間事業８件、公共事業１件です。公共事業は、東奈良遺跡内の都市計画道路の敷設延長で、民間事業では共同住宅建設工事や携帯電話アンテナ建設工事などでした。

発掘調査件数は前年と比較してやや少なく、確認試掘・立会調査件数もほぼ同数です。社員寮の立替や工場などの民間企業の土地の売却が進み、交通の利便性や公共施設の充実等からか大規模な共同住宅の開発が顕著にみられ、北部丘陵の彩都も一部入居が始まっています。

2．平成15年度発掘調査における主要な調査の概要

平成15年度において茨木市教育委員会が実施した発掘調査のなかで、注目される調査は東奈良遺跡の調査があげられます。

東奈良遺跡は、昭和48年から翌年にかけて銅鐸を鋳造していた鋳型やふいごの羽口等が出土し、平成11年には東奈良土地区画整理事業に伴い、都市計画道路と区画道路部分の発掘調査により舌のついた朝鮮半島系とみられる小銅鐸が溝底から出土しました。この調査は平成12年までの長期に渡って実施され、報告書「東奈良－東奈良土地区画整理事業に伴う発掘調査概要報告－」が刊行されました。

平成14年から道路以外の換地に民間の開発がはじまり、共同住宅や保育所・老人福祉施設などが計画され、平成15年も順次発掘調査が実施されました。

この概報にその一端を記載していますが、今後の調査も見込まれ、この東奈良遺跡の環濠集落としての全体像が明らかにされるものと考えられます。

用語等

ＳＢ：建物跡・堀立柱建物跡　　ＳＥ：井戸　　ＳＸ：落込み・不定形土坑

ＳＣ：柱列群　　ＳＫ：土坑　　ＴＫ：堺市の高蔵寺地区を示す。高蔵寺地区は石津川・妙見川と前川に挟まれた丘陵地帯を指す。

ＳＤ：溝・雨落溝　　ＳＲ：流路

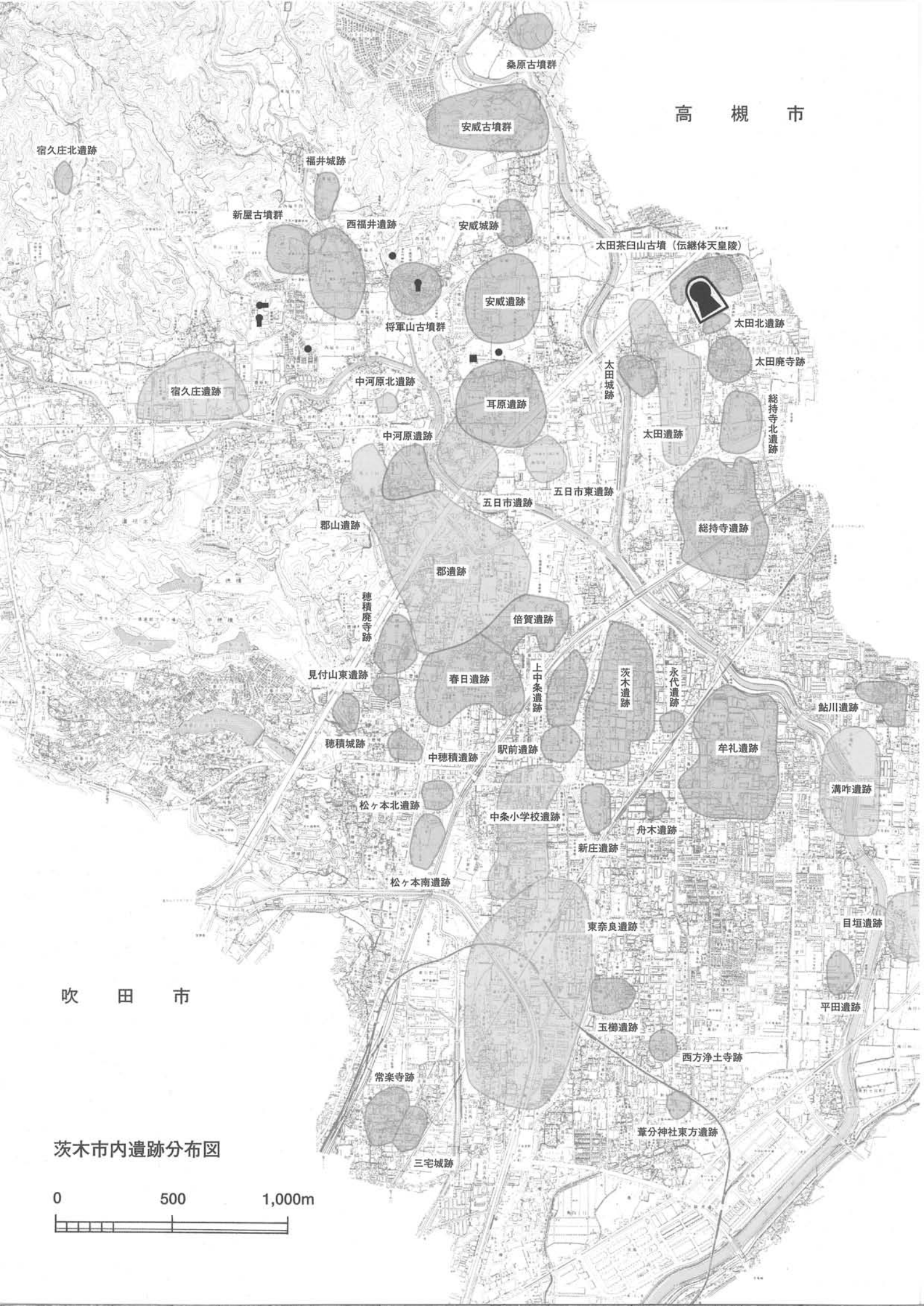
畿内第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ様式：畿内から出土する弥生土器を基準とした土器区分で、機種構成やプロポーション（土器の形態）で、おおよそ５つに分けられⅠ様式が弥生時代前期、Ⅱ～Ⅳ様式が弥生時代中期、Ⅴ様式が弥生時代後期の年代観が与えられている。

庄内式併行期：豊中市庄内遺跡から出土した土器を基準とした時代区分で、おおよそ弥生時代後期末から古墳時代前期初頭にあたる。

須恵器編年ＭＴ15：大阪府の泉北丘陵上に広がる畿内の一大須恵器生産地である陶邑（スエムラヨウ）窯の陶器山（マウント、トウキヤマ）地区15号窯の略称。この窯で生産された須恵器がおよそ６世紀前半代の年代観が与えられている。

図版目次

第１図	葦分神社東方遺跡遺跡	Ⅰ調査区遺構図
第２図	〃	Ⅰ調査区(北から)
第３図	〃	Ⅱ　〃　遺構図
第４図	〃	Ⅲ　〃　〃
第５図	〃	Ⅲ　〃　(東から)
第６図	〃	Ⅳ　〃　遺構図
第７図	〃	Ⅳ　〃　(北から)
第８図	〃	Ⅳ　〃　(南から)
第９図	〃	Ⅴ　〃　遺構図
第10図	〃	Ⅴ　〃　(北から)
第11図	〃	Ⅴ　〃　(南から)
第12図	〃	Ⅵ　〃　遺構図
第13図	〃	Ⅵ　〃　(北から)
第14図	〃	Ⅵ　〃　(落込み)
第15図	〃	Ⅶ　〃　遺構図
第16図	〃	Ⅶ　〃　(南から)
第17図	東奈良遺跡	遺構図
第18図	春日遺跡	遺構図　(Ⅰ・Ⅱ区)
第19図	〃	〃　(Ⅲ区)
第20図	春日遺跡	Ⅰ・Ⅱ区全景
第21図	〃	Ⅰ区　古墳－Ⅰ
第22図	〃	Ⅰ区　溝－Ⅰ
第23図	〃	Ⅱ区　検出状況
第24図	総持寺遺跡	遺構図
第25図	〃	南半(北から)
第26図	〃	石敷
第27図	東奈良遺跡	第２遺構平面図
第28図	〃	３　〃
第29図	〃	２／３遺構面
第30図	〃	各遺構
第31図	春日遺跡	(東から)
第32図	〃	遺構図
第33図	〃	(北から)
第34図	〃	(南から)
第35図	中条小学校遺跡	調査区全体図(１)
第36図	〃	〃　(２)
第37図	〃	古墳１(上) 古墳２(下)平・断
第38図	〃	建物１平・断
第39図	〃	出土遺物(１)
第40図	〃	〃　(２)
第41図	〃	調査区全景(真上から)
第42図	〃	各遺構検出状況
第43図	〃	〃
第44図	牟礼遺跡	遺構図(第Ⅰ遺構面)
第45図	〃	〃　(第Ⅱ　〃　)
第46図	〃	調査区全景(Ⅰ遺構)
第47図	〃	〃　(Ⅱ遺構)
第48図	東奈良遺跡	遺構平面図
第49図	〃	北側調査区第２面
第50図	〃	〃　第３面
第51図	日垣遺跡	調査区全体図
第52図	〃	近景全景断面
第53図	〃	遺構図


高槻市
吹田市
桑原古墳群
安威古墳群
宿久庄北遺跡
福井城跡
新屋古墳群
西福井遺跡
安威城跡
太田茶臼山古墳（伝継体天皇陵）
安威遺跡
将軍山古墳群
太田北遺跡
太田廃寺跡
中河原北遺跡
宿久庄遺跡
耳原遺跡
太田城跡
総持寺北遺跡
中河原遺跡
太田遺跡
五日市東遺跡
五日市遺跡
郡山遺跡
総持寺遺跡
郡遺跡
穂積廃寺跡
倍賀遺跡
見付山東遺跡
春日遺跡
上中条遺跡
茨木遺跡
永代遺跡
鮎川遺跡
穂積城跡
中穂積遺跡
駅前遺跡
牟礼遺跡
溝咋遺跡
松ヶ本北遺跡
中条小学校遺跡
舟木遺跡
新庄遺跡
松ヶ本南遺跡
東奈良遺跡
目垣遺跡
平田遺跡
玉櫛遺跡
西方浄土寺跡
常楽寺跡
葦分神社東方遺跡
三宅城跡
0
500
1,000m

茨木市内遺跡分布図

平成15年度　埋蔵文化財発掘調査 一覧表

No.	遺　跡　名	調査位置	調査期間	調査面積	調　査　内　容	調査原因
1	葦分神社東方遺跡	新和町地内	14.8.12～14.12.16	1,585㎡	平安時代　中世 柱穴　土坑　溝　井戸	道路敷設
2	東奈良遺跡	天王一丁目地内	14.8.28～14.11.20	833㎡	弥生時代　古墳時代 柱穴　土坑　溝 弥生土器　土師器	道路敷設
3	春日遺跡	上穂積一丁目 198他	14.10.10～15.3.5	2,045㎡	弥生時代　古墳時代 ピット群　溝 弥生土器　須恵器	共同住宅建設
4	総持寺遺跡	総持寺一丁目 789-1	14.12.13～15.2.21	30㎡	弥生時代　古墳時代 中世　近世 溝　柱穴　瓦溜り　竈	手洗所建設
5	東奈良遺跡	東奈良三丁目391-1	15.4.4～15.5.30	397㎡	弥生時代　古墳時代 平安時代　中世 環濠2条　大溝1条 井戸状遺構2基 石器　弥生土器　土師器 須恵器　銅鏃　管玉	共同住宅建設
6	春日遺跡	西田中町 285-1・286	15.6.5～15.8.12	592㎡	弥生時代 竪穴住居(一部)　土坑 柱跡　土坑墓	共同住宅建設
7	中条小学校遺跡	新中条町 55-1・57-1・57-2	15.6.6～15.8.27	1,200㎡	弥生時代　古墳時代 奈良時代　中世 古墳(円墳)4基　井戸 区画溝　土坑　建物跡　倉 弥生土器　土師器 須恵器　陶磁器	共同住宅建設
8	東奈良遺跡	東奈良三丁目地内	15.6.30～15.9.8	364㎡	弥生時代　古墳時代 弥生時代前期　環濠 自然流路　落込 溝　土坑　ピット 弥生土器　土師器	道路敷設
9	牟礼遺跡	舟木町 373-3・5・6	15.7.14～15.9.30	871㎡	弥生時代　古墳時代 自然河川　土坑　溝　柱穴 弥生土器　土師器 須恵器	共同住宅建設
10	目垣遺跡	目垣三丁目244-3	15.7.28	10㎡	弥生時代　古墳時代 弥生土器　土師器	携帯電話アンテナ建設
11	目垣遺跡	目垣三丁目 135-1・2	15.12.2～15.12.9	43㎡	弥生時代 溝　柱穴　弥生土器	事務所建設
12	東奈良遺跡	東奈良三丁目 125・126	15.11.12～16.1・29	496㎡	弥生時代　古墳時代 奈良時代　中世　近世 石器　弥生土器　土師器 須恵器　陶磁器　金属器 木器　獣骨	共同住宅建設

葦分神社東方遺跡

所 在 地　茨木市新和町地内

調査原因　道路敷設事業

調査期間　平成14年８月12日～平成14年12月16日

調査面積　1,585㎡

調査担当　宮脇　薫

調査結果

葦分神社東方遺跡は、茨木市域の南端にあり安威川と茨木川に挟まれた沖積地に位置している。

基本土層は、耕土、床土の下層は洪水に伴うと考えられる砂層と灰色粘土層の互層が堆積している。その下層に10～25㎝の暗褐色土の包含層が堆積している。包含層には11～13世紀の遺物が含まれている。遺構面は、灰色粘土、灰色砂質土、砂であり調査地の地区によって異なっており、集落の立地が不安定であることが窺われる。

現在の道路、溝等によって調査区をⅠ～Ⅶ区に分けて行った。

Ⅰ調査区

柱跡、溝、井戸が検出されている。

井戸－Ⅰは素堀である。井戸－Ⅱは井戸側に曲物が底に一段はめ込まれた状態で検出された。

Ⅱ・Ⅲ調査区

北から南に流れる自然河川が検出された。調査区が東西に狭い関係から右岸のみの検出である。幅は２ｍ25㎝、深さ１ｍ45㎝である。

堤の護岸のために竹、木材を使ってしがらみ状に保護されている。12～13世紀の瓦器及び土師器が出土した。

Ⅳ調査区

柱跡、溝、土坑が検出された。

柱跡は径が17～35㎝の円形柱跡である。柱跡には瓦器、土師器が出土するものもみられる。破片であるため明確な時期は不明であるが12～13世紀と考えられる。

土坑－Ⅰは直径が約3.2ｍ、深さが約64㎝の円形である。内より12～13世紀の瓦器、土師器及び砥石が出土している。

Ⅴ調査区

柱跡、溝、井戸、土坑が検出された。

井戸－Ⅲは底が欠き取られた須恵質の甕が井戸側材に用いられた井戸である。井戸－Ⅳは底から２個の底を抜いた桶を井戸側材として用いられた井戸である。井戸－Ⅴは底近くに曲げ物が井

戸側材として用いられた井戸である。

Ⅵ調査区

柱跡、溝、土坑が検出された。

調査区の南端部で浅い落ち込みから12～13世紀の瓦器、土師器がまとまって出土している。

Ⅶ調査区

柱跡、溝、土坑が検出された。調査区の南半は遺構も少ない集落の端の様相を示している。土坑－Ⅲは径が２ｍ70㎝、深さ１ｍ20㎝の円形の土坑である。内より12～13世紀の瓦器及び土師器が出土している。

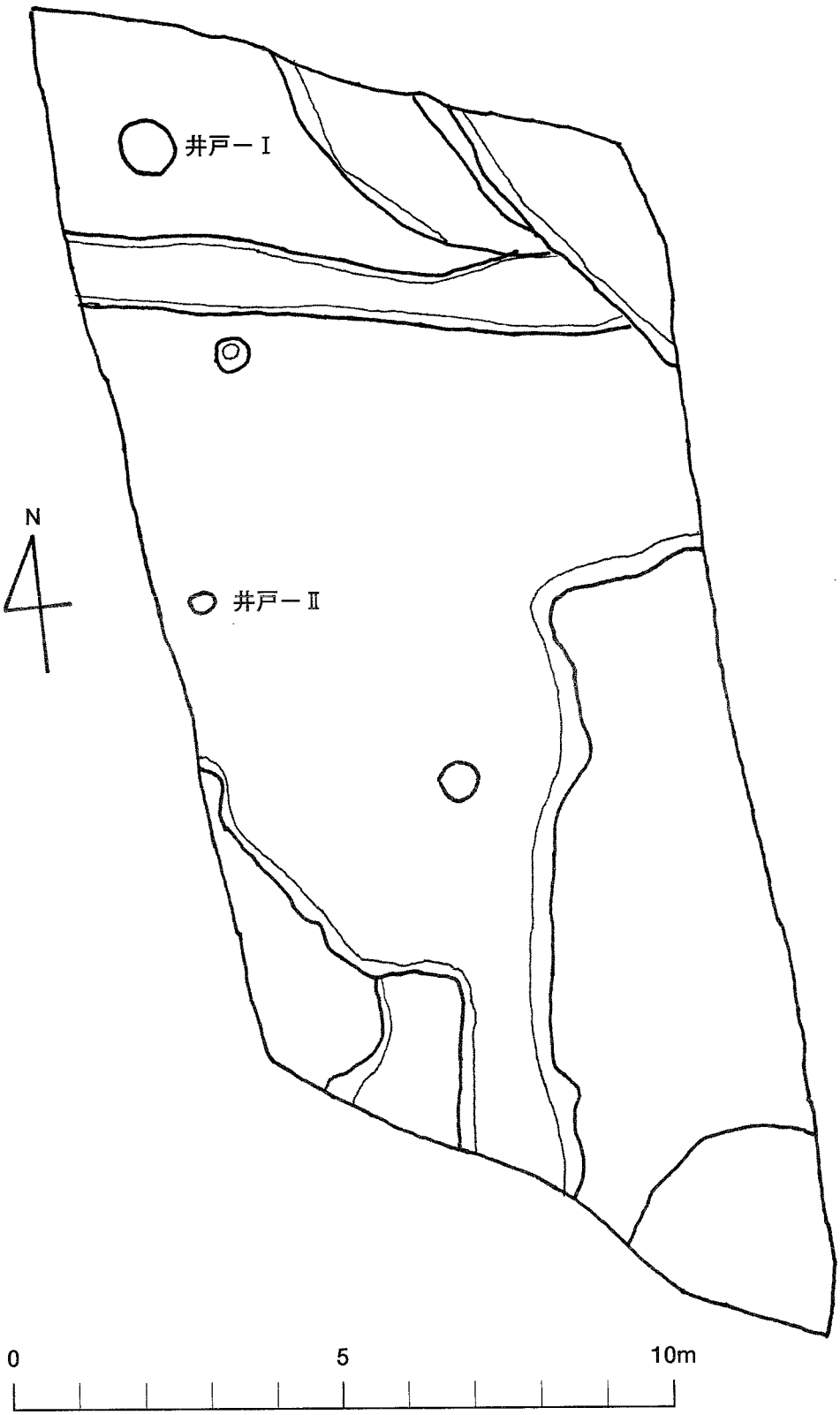
まとめ

今回の調査によって12～13世紀の中世の集落の一端を窺うことができた。

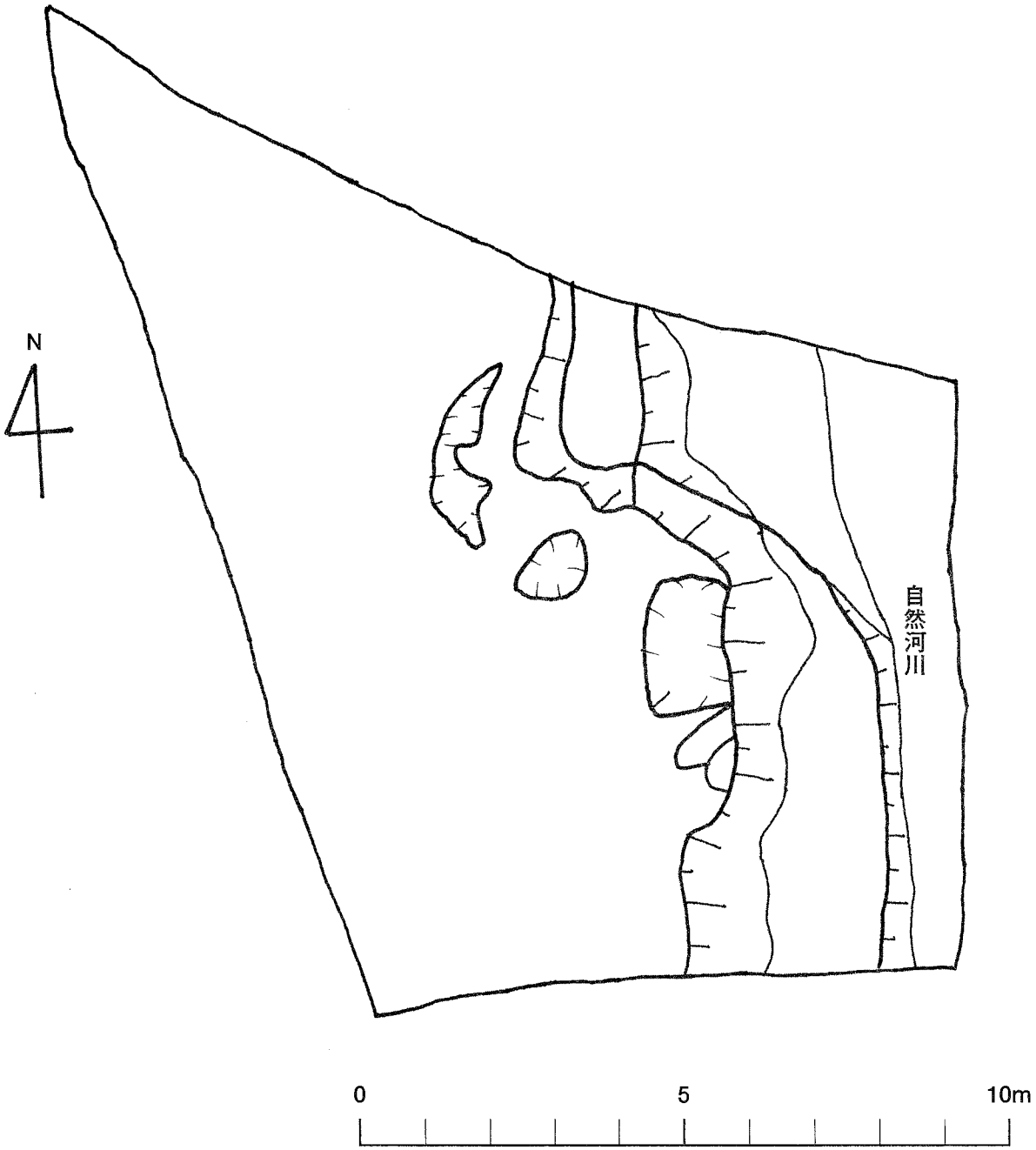
葦分神社東方遺跡の中世集落において、Ⅱ・Ⅲ調査区で検出された川の制御が大きな意味をもつものと考えられる。

茨木市の南部の安威川と茨木川に挟まれた沖積地へと、12～13世紀には開発されていったものと考えられる。

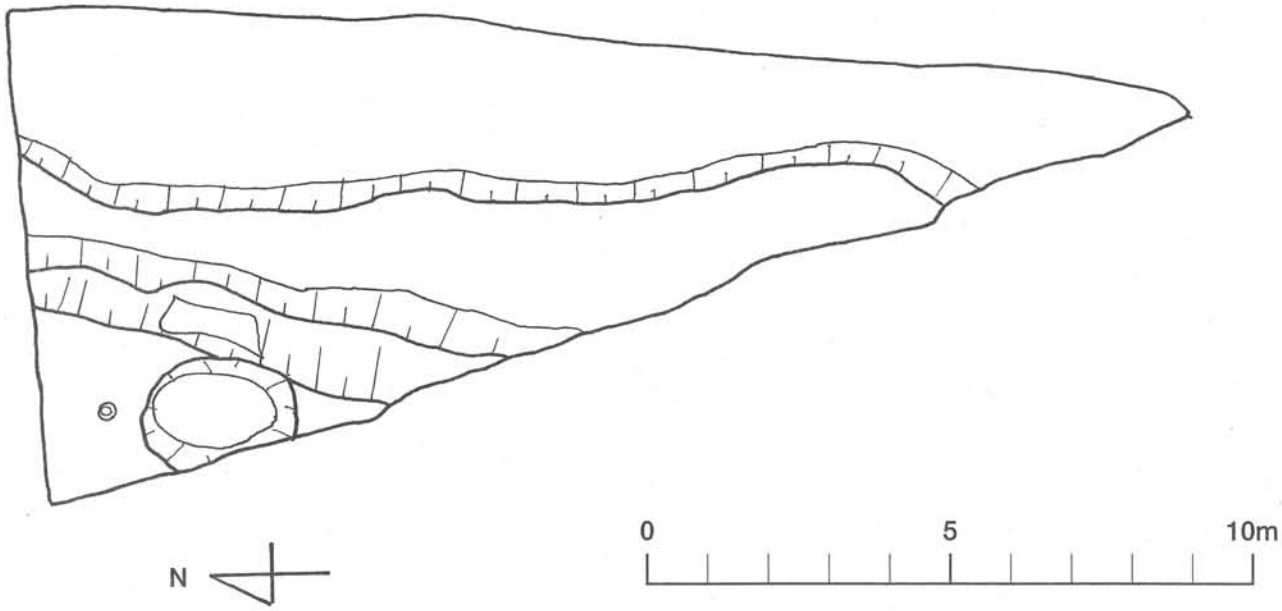
Ⅰ調査区（北側から）



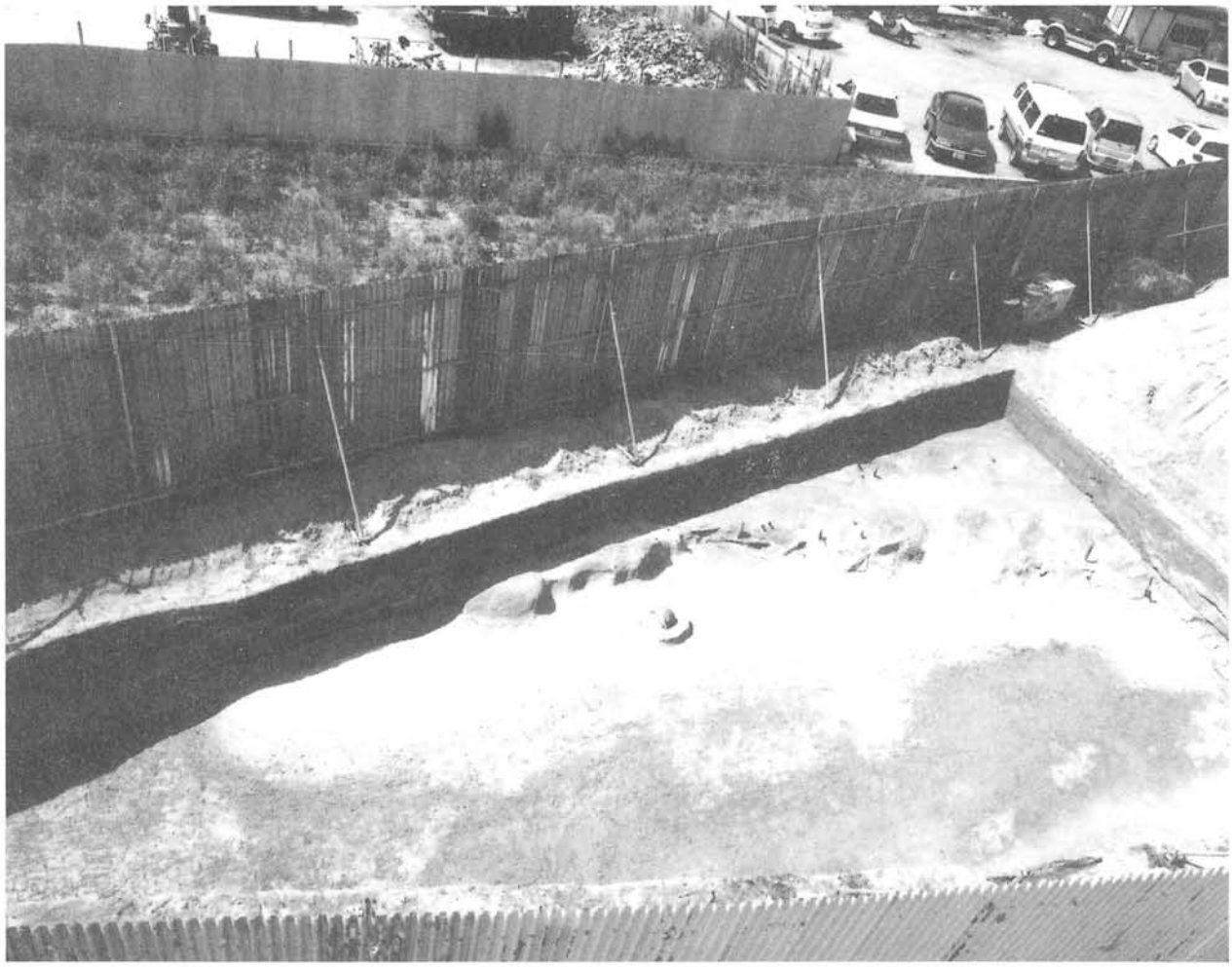
第１図　Ⅰ調査区遺構図



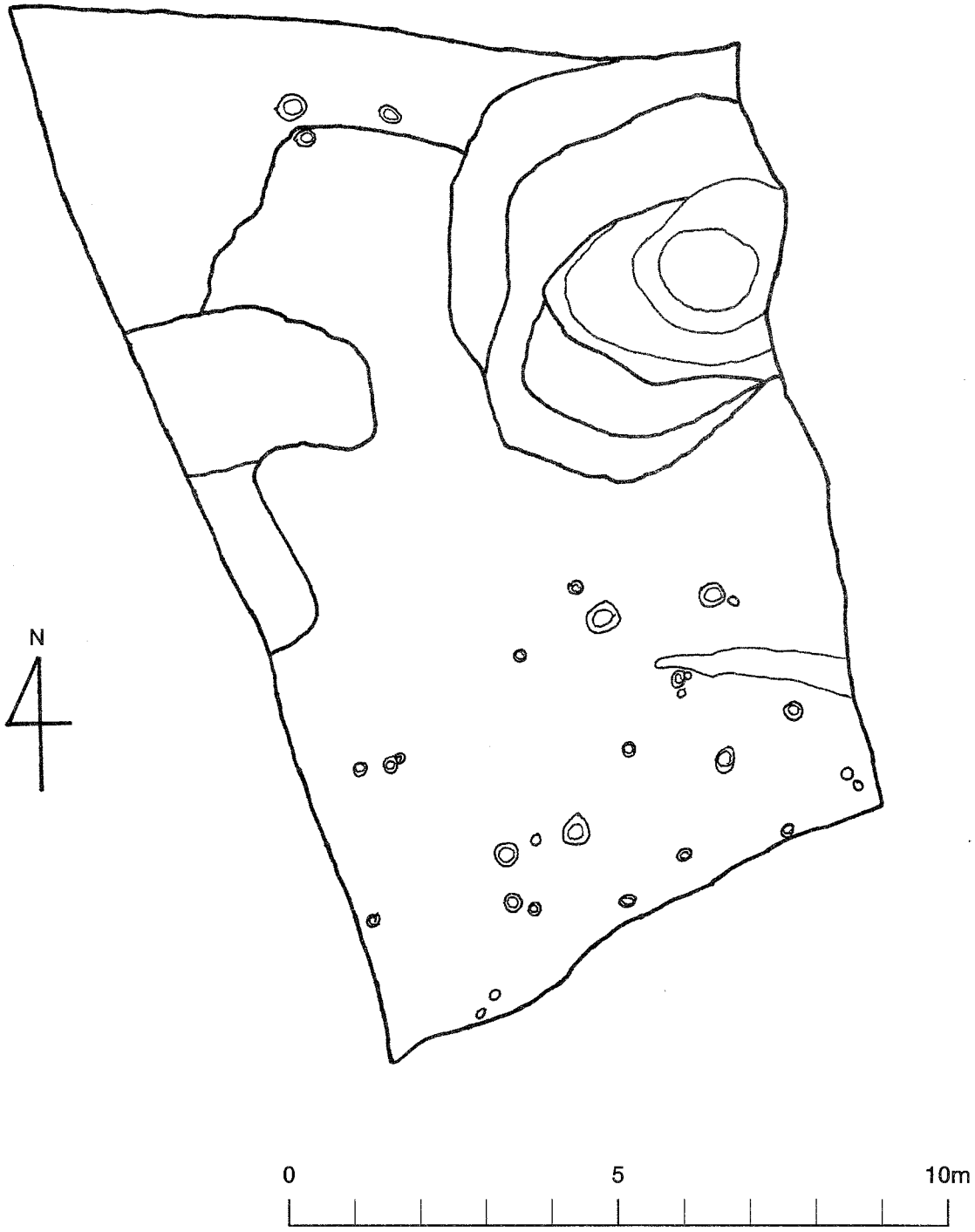
第３図　Ⅱ調査区遺構図



第４図　Ⅲ調査区遺構図



第５図　Ⅲ調査区（東から）



第６図　Ⅳ調査区遺構図

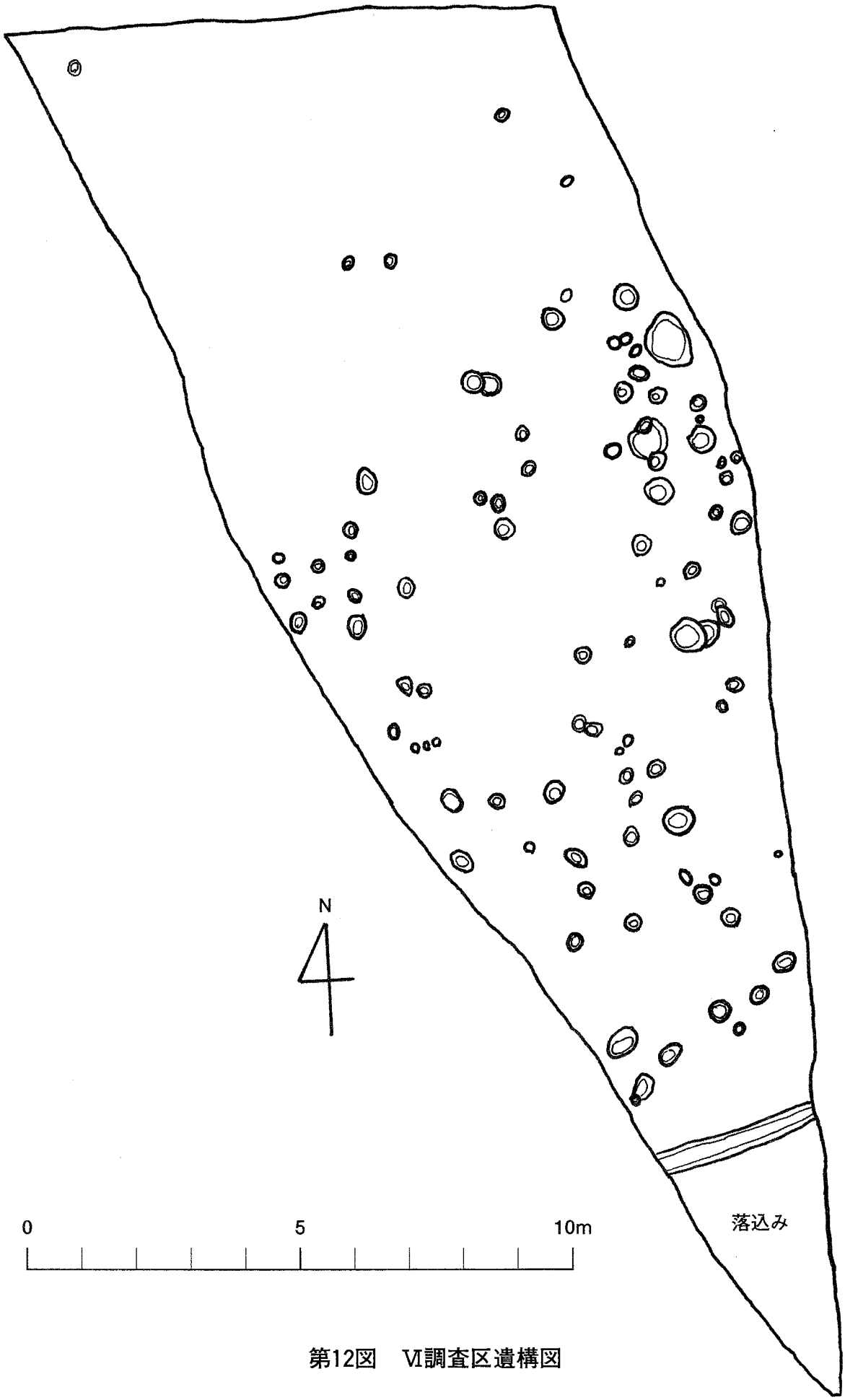
第９図　Ⅴ調査区遺構図

第７図　Ⅳ調査区（北から）

第８図　Ⅳ調査区（南から）

第10図　Ｖ調査区（北から）

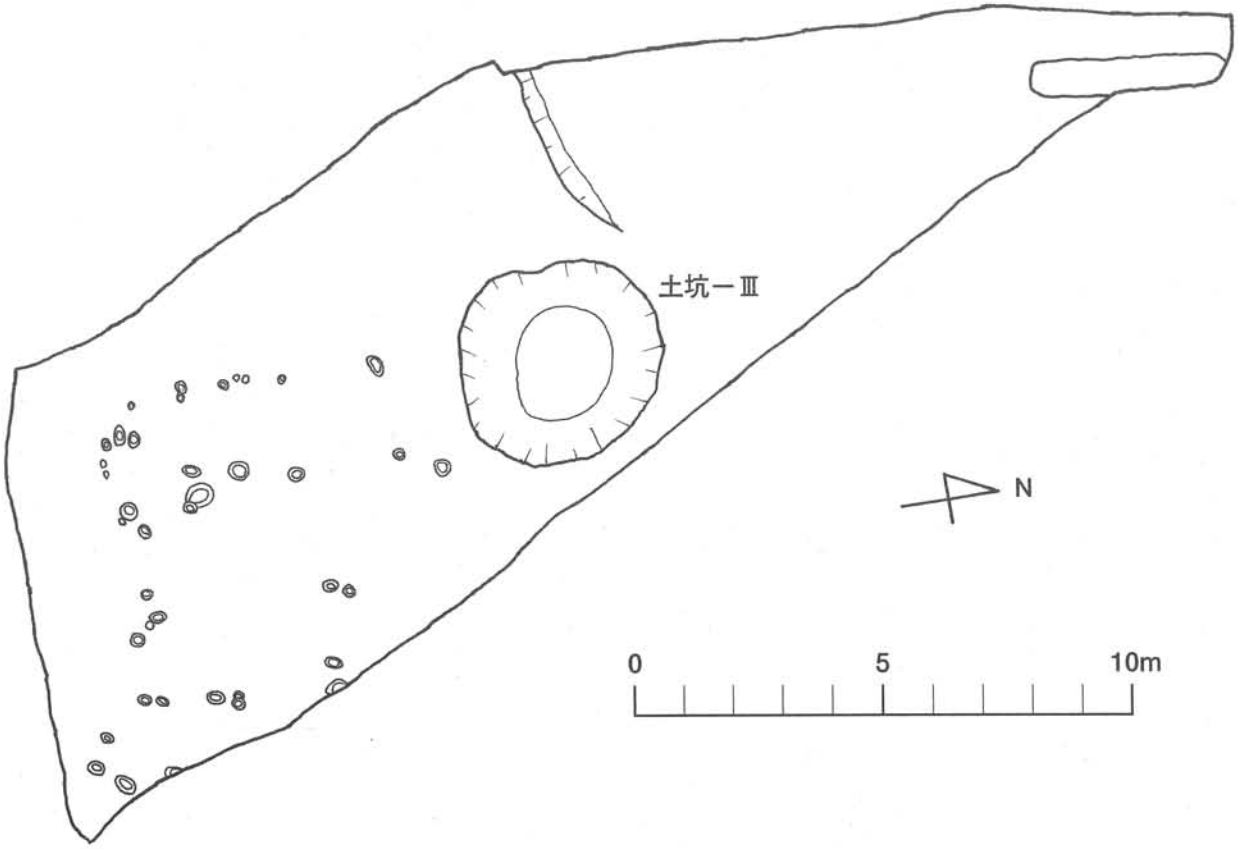
第11図　Ｖ調査区（南から）



第12図　Ⅵ調査区遺構図

第13図　Ⅵ調査区（北から）

Ⅵ調査区（落ち込み）



第15図　Ⅶ調査区遺構図

第16図　Ⅶ調査区（南から）

東奈良遺跡

所 在 地　茨木市天王一丁目地内

開発事業　道路敷設事業

調査期間　平成14年８月28日～平成14年11月20日

調査面積　833㎡

調査担当　宮脇　薫

調査結果

東奈良遺跡は、茨木市の南部に位置する弥生時代から中世にいたる複合遺跡である。特に弥生時代の環濠集落として知られている。

調査は現道路及び水路等によって調査区を４区に分けて行った。

基本土層は耕土、床土でその下層は、第Ⅰ調査区では北約３ｍで暗褐色土の須恵器、土師器を含む包含層が確認された。遺構面は黄色粘土である。南北にわたる約170ｍの間に約２ｍ35㎝ の高低差が認められる。

第Ⅱ調査区から耕土、床土の下層に無遺物層である淡黄緑土、暗灰色粘土、南端の第Ⅳ調査区では下層に青灰色砂の堆積が認められる。地山と考えられる最終面は灰色粘土である。

第Ⅲ調査区の北端において、東西方向に幅１ｍ35㎝を測る濁淡黄色の砂層が、灰色粘土の上面で検出された。

遺物は含まれなかったが、調査区の制限で深さ約60㎝の確認にとどまった。過去の調査で確認されている古墳時代前期の大溝と考えられる。

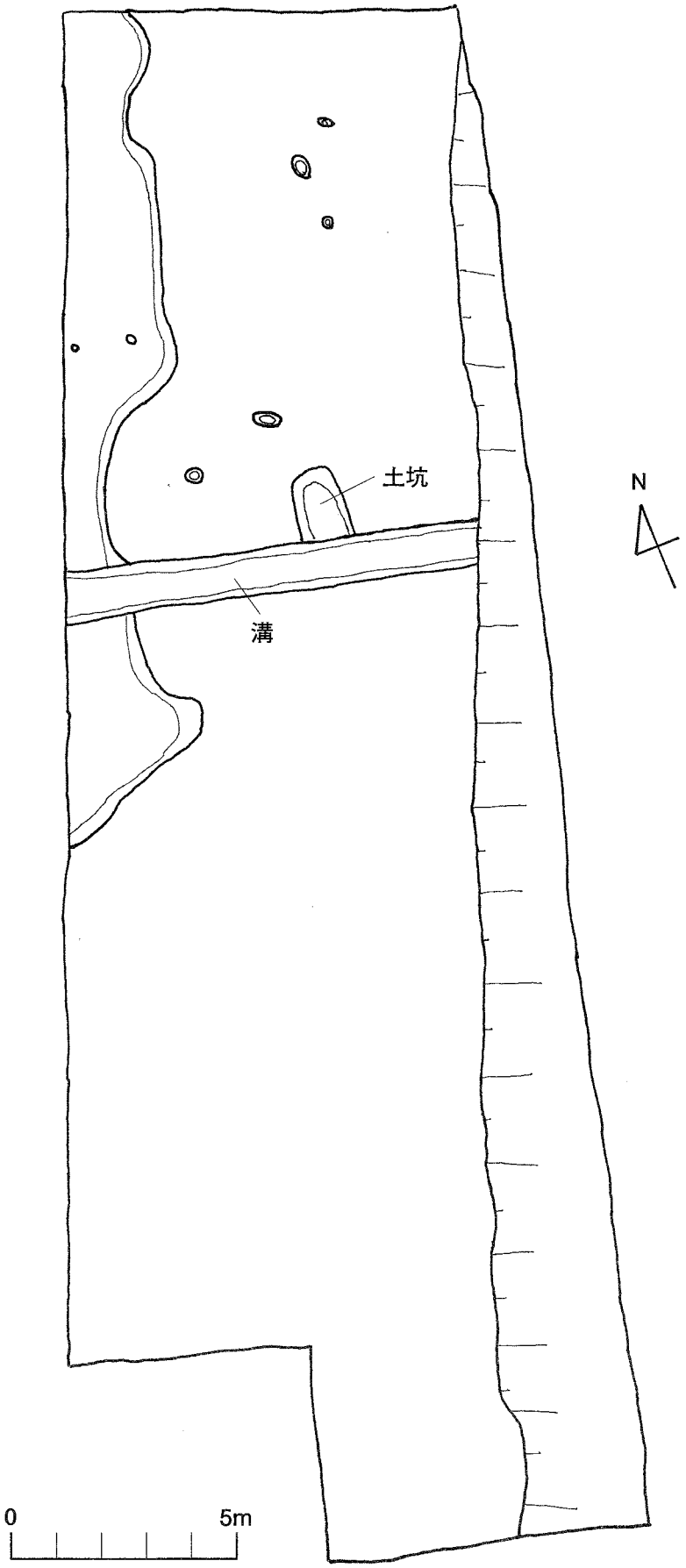
第Ⅰ調査区で検出された遺構は溝、土坑、柱跡である。

溝は幅が約94㎝、深さが約35㎝ である。溝内より弥生時代後期（畿内第Ⅴ様式）の弥生土器が出土している。

土坑は、短軸が約１ｍ７㎝、長軸１ｍ66㎝ あり、楕円形である。内より弥生時代後期（畿内第Ⅴ様式）の幅広のタタキ目の甕の胴部の破片が出土している。

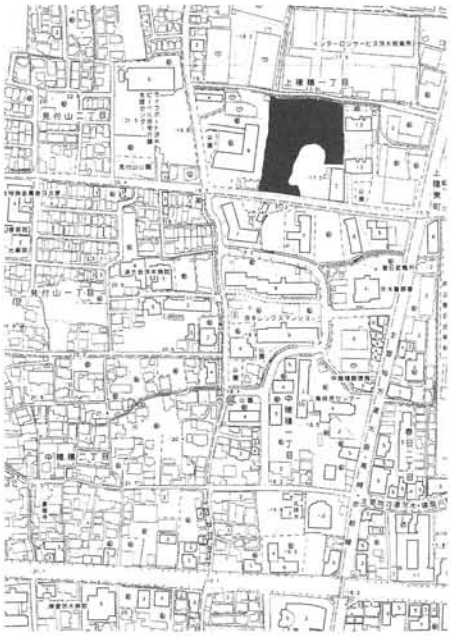
柱跡は、径が20～35㎝ の円形である。

当該地の調査地域は東奈良遺跡のなかでも西の端にあたるものと考えられる。



第17図　東奈良遺跡遺構図（Ⅰ区）

春日遺跡



所 在 地　茨木市上穂積一丁目198他

開発事業　共同住宅建設事業

調査期間　平成14年10月10日～平成15年３月５日

調査面積　2,045㎡

調査担当　宮脇　薫

調査結果

今回の調査地は、茨木市域の西部の千里丘陵の裾野に位置している。西に見付山遺跡、北に穂積廃寺跡、郡遺跡、東に春日遺跡に隣接する倍賀遺跡が所在する。

基本土層は耕土、床土の下層に灰褐色の包含層が５～10cm堆積している。包含層には弥生土器、須恵器、土師器、埴輪及び少数であるが飛鳥から奈良時代の瓦が含まれている。瓦は穂積廃寺跡の関係する遺物であると考えられる。

調査は共同住宅部分をⅠ区として、集会所をⅡ区、立体駐車場部分をⅢ区として分けて行った。

Ⅰ区

Ⅰ区で検出された遺構は、墳丘部及び主体部等が後世に削り取られた周溝のみの円墳のほか、溝、柱跡である。

古墳－Ⅰは調査区の南で全体の約１／２が検出された。長径が約27ｍの中型の円墳である。周溝から円筒埴輪片及び須恵器片が出土した。出土した遺物から６世紀後半の古墳と考えられる。

溝－Ⅰは幅が約６ｍ、深さ約47cmで堤の上部は削られている。内より６世紀末の須恵器及び土師器が出土している。

溝－Ⅱは方形の角近くの部分が検出された。規模は幅が約47cm、深さ約26cmである。内より古代末～中世の遺物が出土した。

Ⅱ区

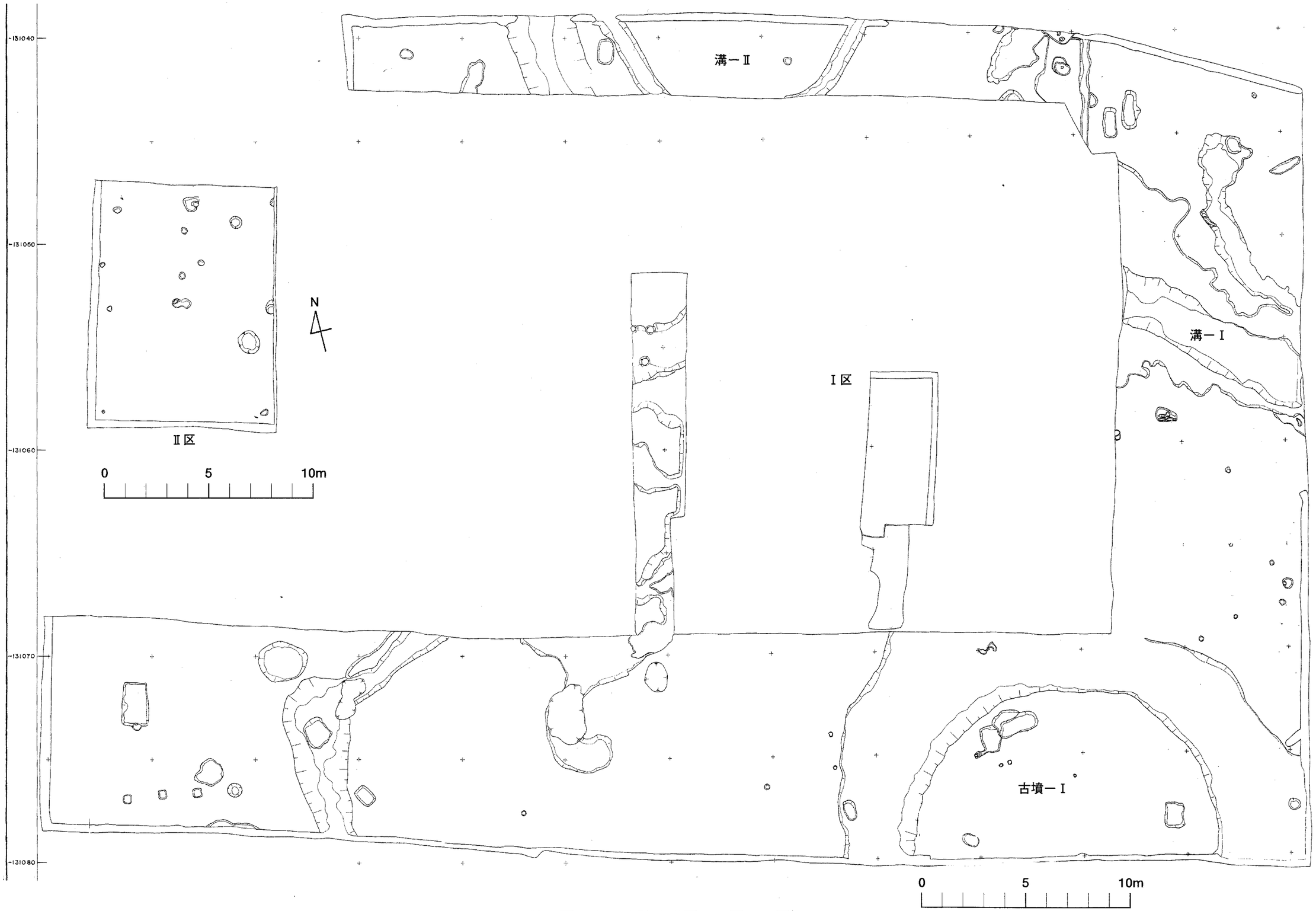
柱跡が出土した。

Ⅲ区

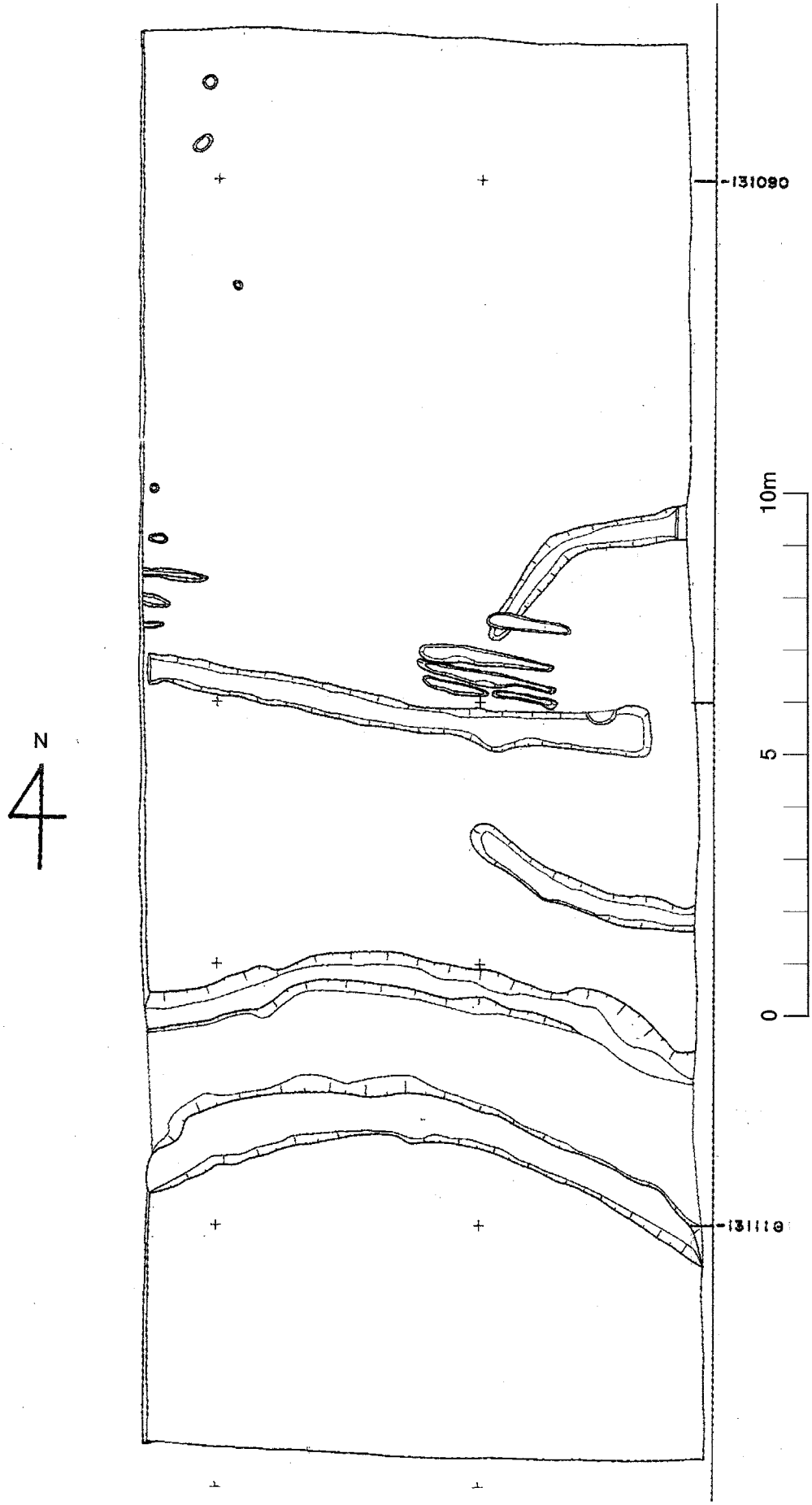
古墳－Ⅱ

調査区の南で古墳全体の１／４が検出された。長径が約12ｍの小型の円墳である。周溝内より円筒埴輪片が出土した。時期は６世紀後半である。

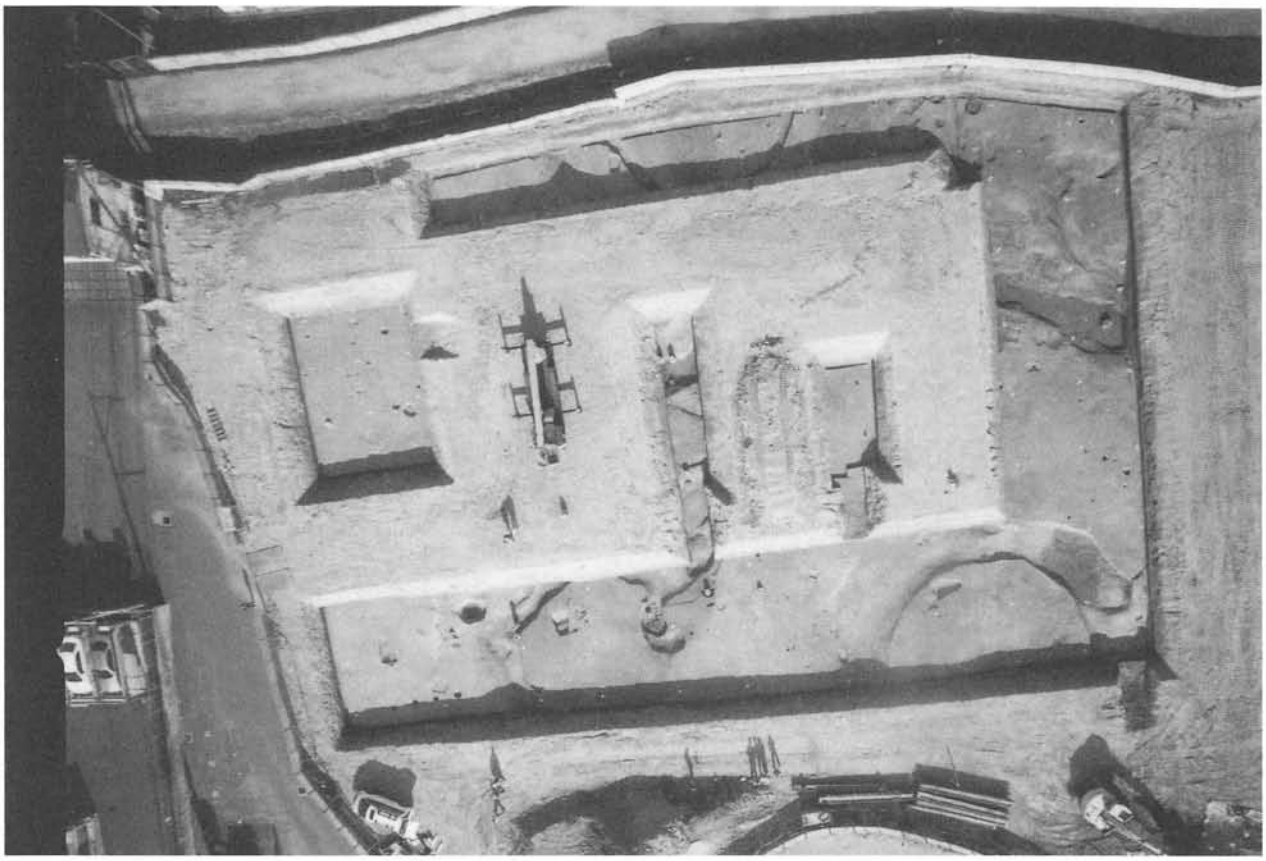
他に溝が６条検出された。内より須恵器、土師器の細片が出土しているが、明確な時期は不明である。削平された古墳が２基検出されたが、見付山遺跡の北に隣接した郡遺跡においても検出されており、付近一帯には古墳時代後期の古墳群が存在していたと考えられる。



第18図　春日遺跡遺構図（Ⅰ区・Ⅱ区）



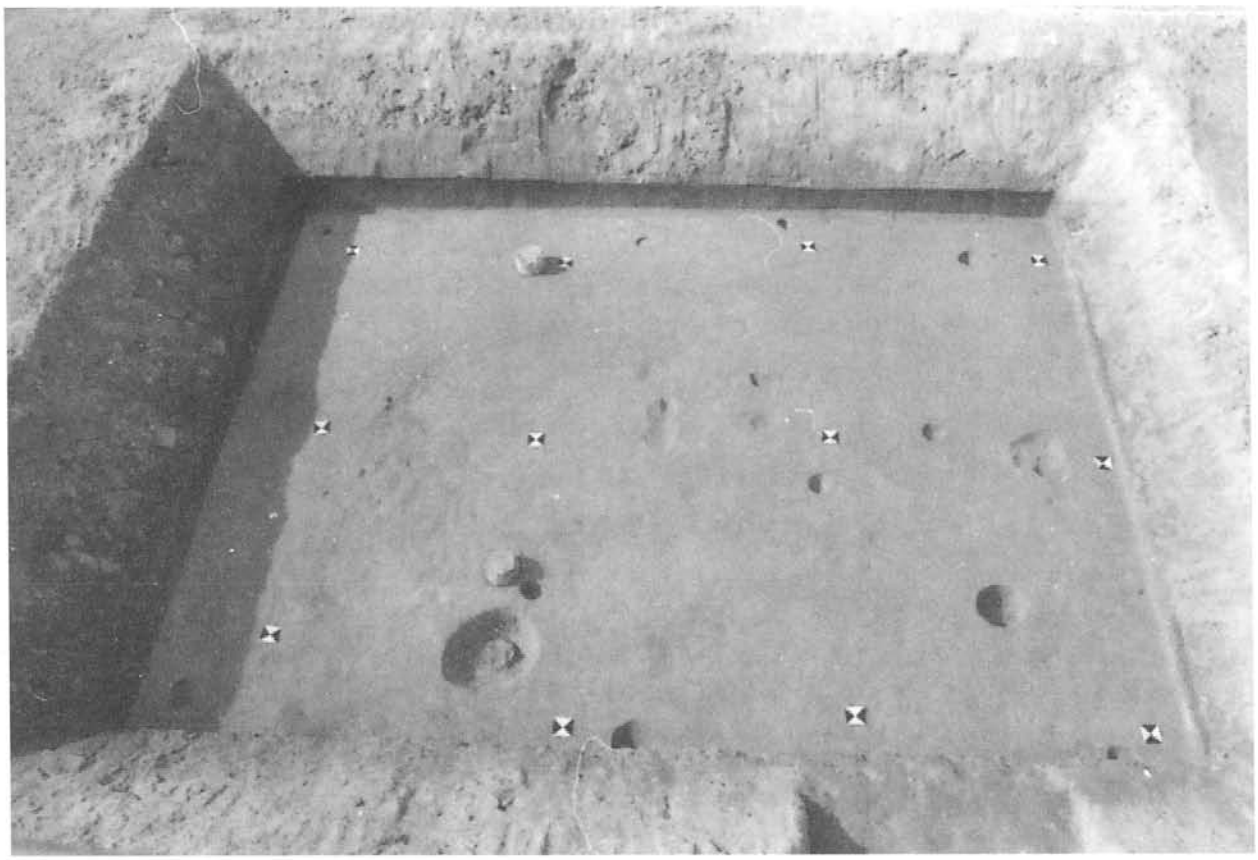
第19図　春日遺跡遺構図（Ⅲ区）（前頁第18図東南端）



第20図　Ⅰ・Ⅱ区全景

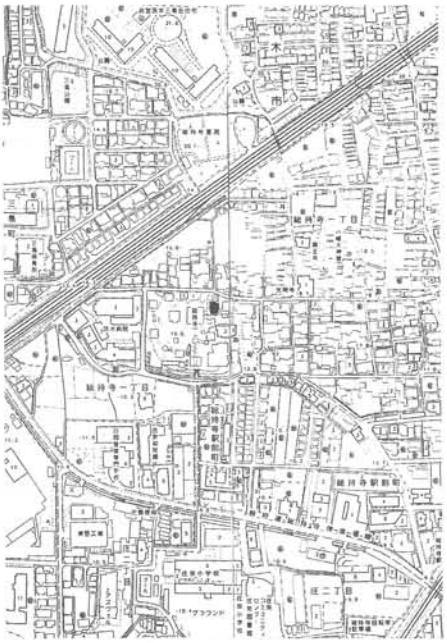
第21図　Ⅰ区古墳－Ⅰ

第22図　Ⅰ区溝－Ⅰ



第23図　Ⅱ区

総持寺遺跡



所 在 地　茨木市総持寺一丁目789-1

開発事業　手洗所建設事業

調査期間　平成14年12月13日～平成15年２月21日

調査面積　120㎡

調査担当　宮脇　薫

調査結果

今回の調査地は、茨木市の北部の老ノ坂山地から派生する三島台地の先端部に位置する西国巡礼第22番札所の総持寺の境内の東門に隣接している。

調査地は現在の境内の中であり、地表下10㎝で近世の遺構面が表れる。その下30㎝で地山の礫混じりの黄色土が広がっている。検出した遺構は竈、柱跡、溝、土坑、甕が埋め込まれていた土坑である。

現境内の東北端の東門近くの調査地においては、径が１～３㎝の自然の小石によって石敷きが認められた。また、調査区の東南部においては中世の瓦の破片の集積が認められた。

調査区の南では、竈が南北に南から東西に三基、二基、一基と三列に並んだ状態で検出された。

南の三基は焚き口及び掃き出し口が地下にあり、上部の釜座の部分は地表部に幅が10㎝で、高さ５㎝と粘土帯によって一段高く設けられている。

二列目の二基は、焚き口及び掃き出し口は地表にあり、釜座は削られていると考えられ、高さ約10㎝、幅５㎝の粘土帯が検出された。

北の一基の竈は、他の５基と違い磚を用いて造られている。地表下12㎝の円形の土坑を掘り、一辺が27㎝、厚さ５㎝の磚を２段、列との間を10㎝空けて２列を平行に設置している。

磚列の間を焚き口及び掃き出し口としている。磚列の上部を幅12㎝、長さ25㎝、厚さ７㎝の磚を円形に配置して釜座を造っている。

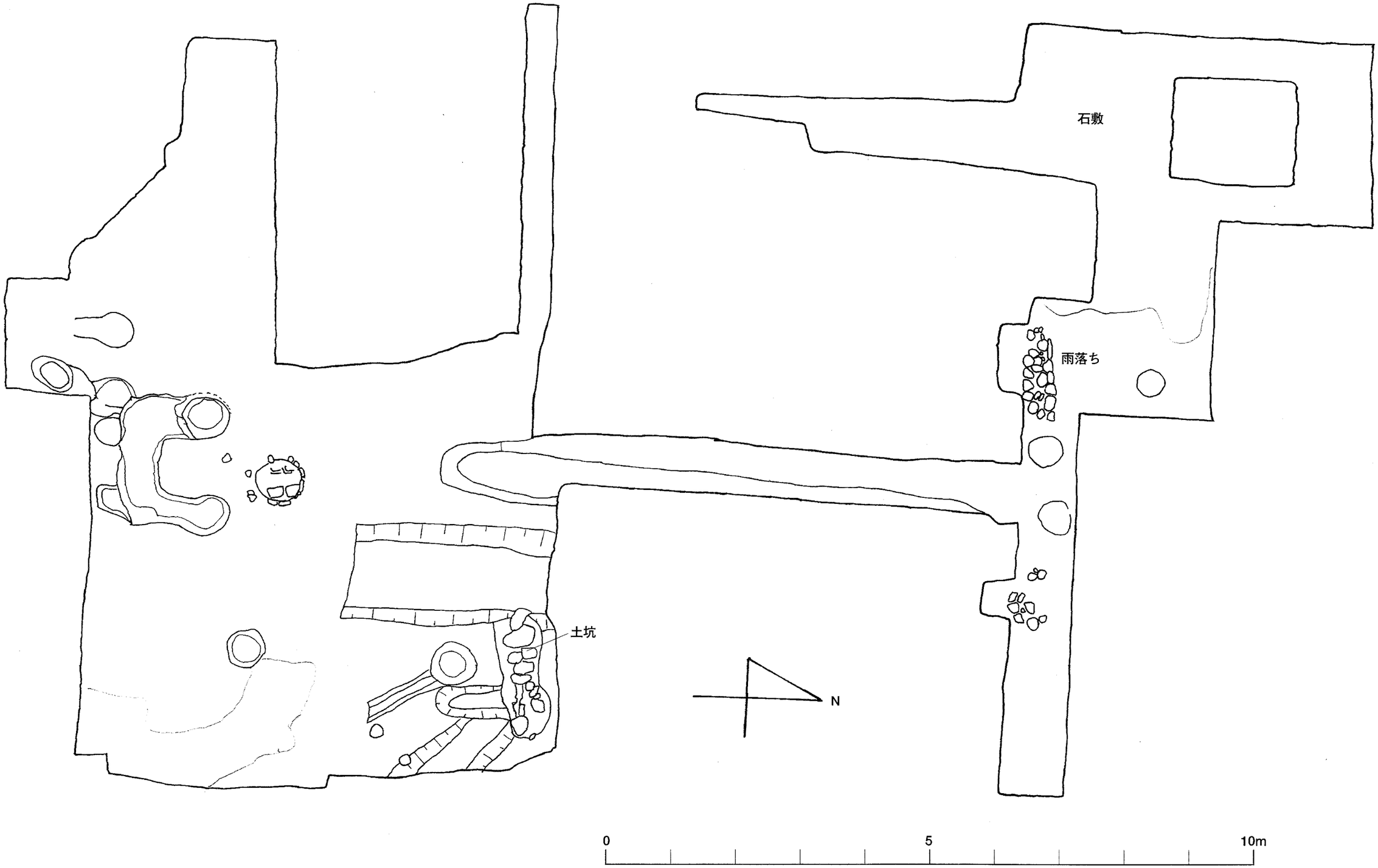
調査区の東門近くで甕が埋められた円形の土坑が３基検出された。

調査区の中央部付近では、長軸２ｍ10㎝、短軸１ｍ20㎝、深さ27㎝の楕円形の土坑が検出された。底の中央付近に一辺15㎝の角材が打ち込まれ、その上部に一辺15㎝の角材が長軸に沿って置かれ、その上に自然石が投げ込まれた状態であった。用途としては材に括り付け、上下左右のずれを防ぐようにして、幡等を立てたものと考えられる。

調査区の北では、東西方向に幅が45㎝の雨落ち遺構の溝が15～25㎝の河原石を使った状態で検出された。

その他、溝、柱跡等の遺構は近世のみのものである。それ以前の遺構は検出されていない。しかし、遺物は弥生時代後期（畿内第Ⅴ様式）の弥生土器、古墳時代の須恵器、土師器が出土している。他に中世の瓦が出土している。

特に竈が出土されたことから近世の庫裏の存在が予測されたが、建物の束石がなくなっているのか建物の遺構は検出されず、また、総持寺の創建の頃の平安時代の瓦等の遺物も位置がはずれているのか出土しなかった。



第24図　総持寺遺跡遺構図

第25図　総持寺遺跡南半（北から）

第26図　総持寺遺跡（石敷）

東奈良遺跡

所 在 地　茨木市東奈良三丁目391－1

開発事業　共同住宅建設事業

調査期間　平成15年４月４日～平成15年６月３日

調査面積　397㎡

調査担当　宮本　賢治

調査結果

東奈良遺跡は、茨木市の南部の東奈良・奈良・沢良宜西・天王、若草町にまたがる、標高７ｍ前後の沖積平野に立地する、弥生時代前期から始まる遺跡である。

今回の調査地は、東奈良遺跡の中でも中心部の地域にあたる。なお、調査地のすぐ南側では、昭和52年７月から翌年にかけて行われた国鉄貨物引き込み線（現ＪＲ）の事前の調査では、弥生時代前期の環濠が３条検出されている。注１『東奈良』発掘調査概報Ⅱ

また北側では、平成10年12月から平成12年３月末までの期間「東奈良土地区画整理事業」に伴う発掘調査が行われており、第１調査区及び第５調査区、第９調査区において、検出された溝（環濠）が先に行われた昭和52年の調査時に検出された３条の環濠に繋がるものとして考えられている。注２『平成11年度発掘調査概報』注３『東奈良』－東奈良土地区画整理事業に伴う発掘調査概要報告－

したがって、今回の調査地は、既往の調査の際に検出された、弥生時代前期に造られたと考えられる３条の延長線上に結びつくものとして調査前から期待されたものである。

今回の調査は、中世に営まれた耕作地を中心とした面(第１遺構面)、弥生時代前期後半から古墳時代前期の生活面（第２遺構面)、そして弥生時代前期の生活面（第３遺構面＝最終遺構面）の３つの生活面を対象に調査を行った。

基本層序

基本層序は、大きく６つの層に分けられる。

上層から順に、現代の耕土（約10㎝)、中世の遺物包含層（約10㎝、灰黄褐色砂質土層)、中世の灰黄褐色粘質土層(約10㎝)、この層の上面において中世の耕作地(主に鋤溝を中心とするもの)を中心とした生活面の遺構を検出。(第１遺構面)。

弥生時代前期後半から古墳時代前期の遺物包含層(約25㎝)、黄灰色砂質土層から黒褐色粗砂層、この層の上面において弥生時代前期後半から古墳時代前期の生活面遺構を検出。(第２遺構面)。

弥生時代前期の終わりから中期後半にかけての遺物包含層（約27㎝)。

そして、明黄褐色砂質土層(地山層、この層の上面において弥生時代前期の遺構面を検出。(第３遺構面＝最終遺構面）となる。

ただし、この６層には間層を挟む箇所がいくつか見られるところもある。

出土遺物

出土した遺物としては、コンテナパッド（縦14×横36×奥行き56㎝）の箱に換算して約200箱に及んだ。

内訳は、中世以降の遺物を中心とした土器、弥生時代前期から古墳時代前期にかけての壺、甕、鉢、高坏といった主要な４器種をはじめ、蓋、ミニチュア土器（広口壺）、ひさご型土器、把手（とって）付台付鉢といった弥生土器や古墳時代前期の土師器や須恵器などの土器類をはじめ、石包丁や石鏃、環状石斧、砥石などの石器類が出土している。

また、第２遺構面の遺物包含層から銅鏃が出土している。この他に玉類のうち管玉が第２遺構面直上精査時に１点、第２遺構面のＳＫ－102から１点、第３遺構面のＳＰ－2001から管玉が１点の合計３点出土している。

また、鹿の下顎骨や明らかに加工されたと思われる角といった骨類、第２遺構面のＳＥ－201の底から出土した木製品や未完成品などの木類、花粉分析・土壌サンプルといった植生に関するものなどである。

各遺構

第１遺構面において中世の生活面に鋤溝が82条検出された。この鋤溝遺構は、先に行われた平成14年度の有料老人ホーム建設工事に伴う発掘調査において検出された鋤溝と符号するものである。注４　『平成14年度発掘調査概報』

第２遺構面では、弥生時代中期頃から古墳時代前期頃の生活面の痕跡を残した遺構を多数検出した。その内訳として、井戸状遺構１基、土坑約20基、溝約10条、柱穴約700口以上を検出している。

ＳＫ－102からは管玉が１点出土している。一部欠損しているが、ほぼ完全な形で出土している。大きさは全長0.9㎝、直径は0.3㎝、孔径0.2㎝を測り、色は緑色に近い黒色を呈する。

また、遺構面直上精査の際にも管玉を１点出土している。原型をとどめておらず、半分以上が欠けた状態で出土している。大きさは残存長約1.5㎝、直径は0.7㎝、孔径0.2㎝を測り、色は緑灰色を呈する。

ＳＥ－201の底からは土器と共に木製の未製品が出土している。

内訳は、鍬の未製品が１点、未完成品が１点、木片が１点、それに弥生時代中期頃のものと思われる土器が伴出している。また、遺構からの出土ではないが、調査区の北東に位置する東壁側溝内の遺物包含層内の断面中から、刃部の先を真上に向けた状態で見つかっている。大きさは残存長3.3㎝、幅1.2㎝、厚さ0.3㎝を測り、色は緑灰色を呈する。

第３遺構面においては、弥生時代前期の生活面の痕跡を残した遺構を検出した。その内訳は、環濠３条、井戸状遺構１基、土坑18基、溝７条、柱穴約400口以上を検出している。３条の環濠の造営時期としては、ＳＤ－303が前期の最も古い時期のもので、次いでＳＤ－301・ＳＤ－302と続くが、これらの環濠にはあまり時期差はないものと思われる。

ＳＤ－301は弥生時代前期の環濠で、環濠の廃絶とともに埋め戻され、その上面（第２遺構面）

に柱穴遺構が検出されている。この環濠は、幅約3.5ｍ、深さ約1.0ｍの規模を持つ。断面形態はやや上辺の幅が広く、上辺と底辺の幅の差があまりみられない逆台形で、平底面の様相を呈す。この溝は調査区の中央を走っており、既往の調査かみられる環濠の一部であることが判明した。

次にＳＤ－302の環濠であるが、この環濠は、幅約4.5ｍ、深さ約1.3ｍの規模を持つ。断面形態はＶ字形で、一番底の部分は人が一人やっと立てる程の幅である。調査区の東端付近に位置しており、この環濠もＳＤ－301と並列するように南西方向から北側に向かって伸びている事が分かる。

ＳＤ－303についても第２遺構面から検出された溝で、今回の調査区の中で最も古い環濠である。この環濠は、幅約1.0ｍ、深さ約0.5ｍの規模を持つ。先に述べたＳＤ－301やＳＤ－302と比べ、規模は小さい。断面形態はＵ字形で、丸底の様相を持つ。この環濠の性格は、規模としてはやや小さいものの防御的というよりも、環濠内の住居などの施設と他とを区画する意味合いをもつものと考えられる。また、環濠以外ではＳＰ－201から管玉が１点出土している。大きさは全長2.6㎝、直径0.8㎝、孔径0.3㎝を測り、色は黒色を呈する。

まとめ

弥生時代前期の環濠が３条検出し、その結果として冒頭にも述べたように昭和52年（国鉄貨物線）の調査のⅡ－Ａ区で検出された溝－25、26、27と、平成11年度の第５調査区のＳＤ－８、１、第１調査区のＳＤ－２、１、第９調査区のＳＤ－Ⅳ、Ⅴ、Ⅲと、今回のＳＤ－302、303、301とがそれぞれ繋がることが確認できた。

また、平成14年度の老人ホーム建設工事に伴う発掘調査の第６遺構面で、調査区南西隅からＳＤ－451の北東側の肩が検出されており、規模や環濠のはしる方向から判断して、今回の第３遺構面で検出されたＳＤ－301と繋がる事が分かった。

今回の３条の環濠は、これまでの既往の調査における地区毎に検出された環濠と連結すると、総検出距離は東端から順に、溝－27（Ｓ52）・ＳＤ－301（Ｈ15）・ＳＤ－１（Ｈ11第５調査区）・ＳＤ－451（Ｈ14）・ＳＤ－１（Ｈ11第１調査区）・ＳＤ－Ⅲ（Ｈ11第９調査区）は約78.5ｍ。

溝－26（Ｓ52）・ＳＤ－303（Ｈ15）・ＳＤ－Ⅴ（Ｈ11第９調査区）は約37.5ｍ。

溝－25（Ｓ52）・ＳＤ－302（Ｈ15）・ＳＤ－８（Ｈ11第５調査区）・ＳＤ－２（Ｈ11第１調査区）・ＳＤ－Ⅳ（Ｈ11第９調査区）は約59ｍを測る。（ただし溝間の未調査部分は除く）

これらの事から、集落の中心部から北側の一部と東側、南側の大まかな全体像が見えてきたと考えられる。また時期差はさほどないとしてもこの３条の環濠に限れば、集落を中心にまず最初にＳＤ－303が、次いでＳＤ－301、ＳＤ－302と造営されていったものと考えられる。

参考文献

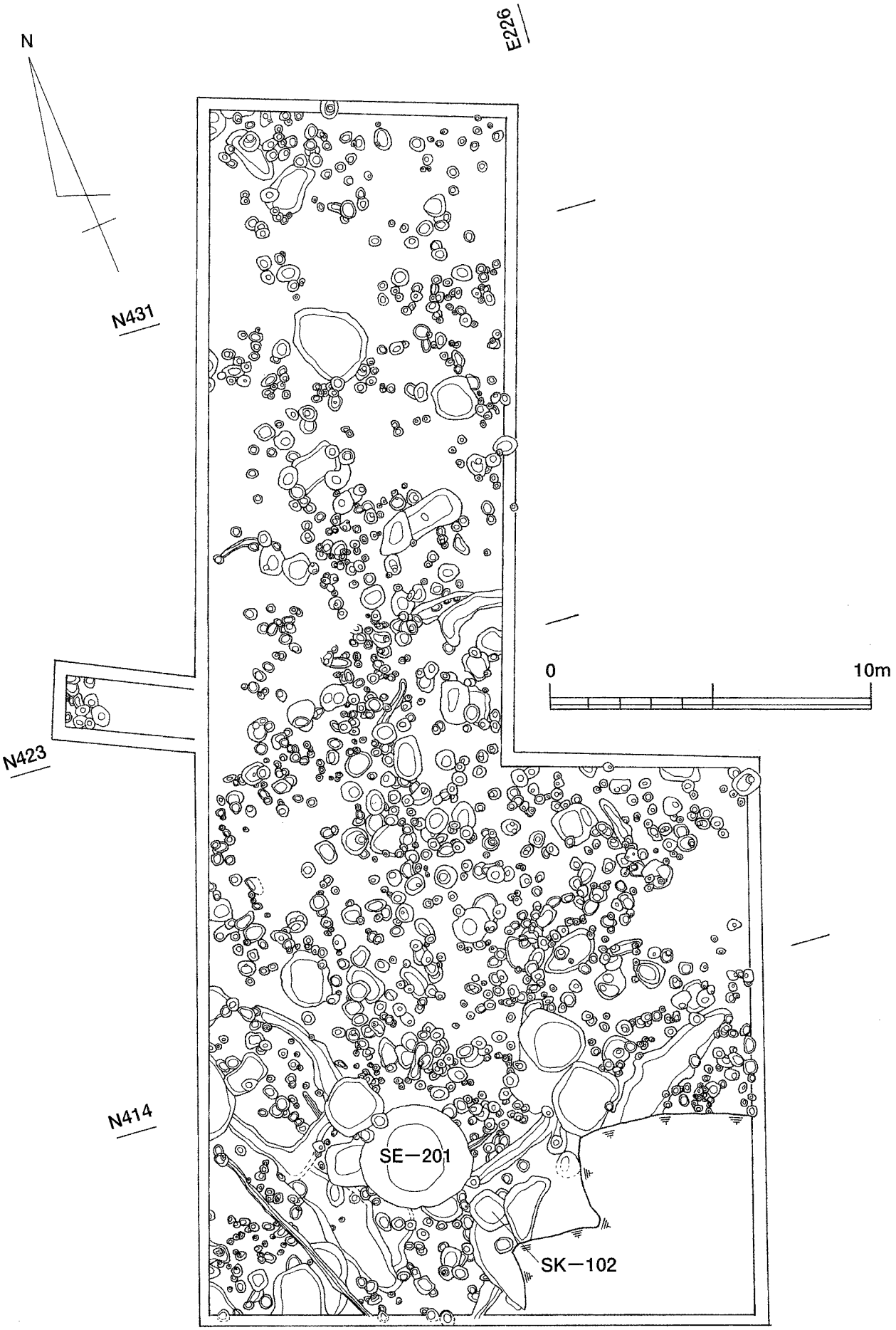
注１　『東奈良』発掘調査概報Ⅱ　昭和56年２月20日　東奈良遺跡調査会

注２　『平成11年度発掘調査概報』　平成12年３月31日　茨木市教育委員会

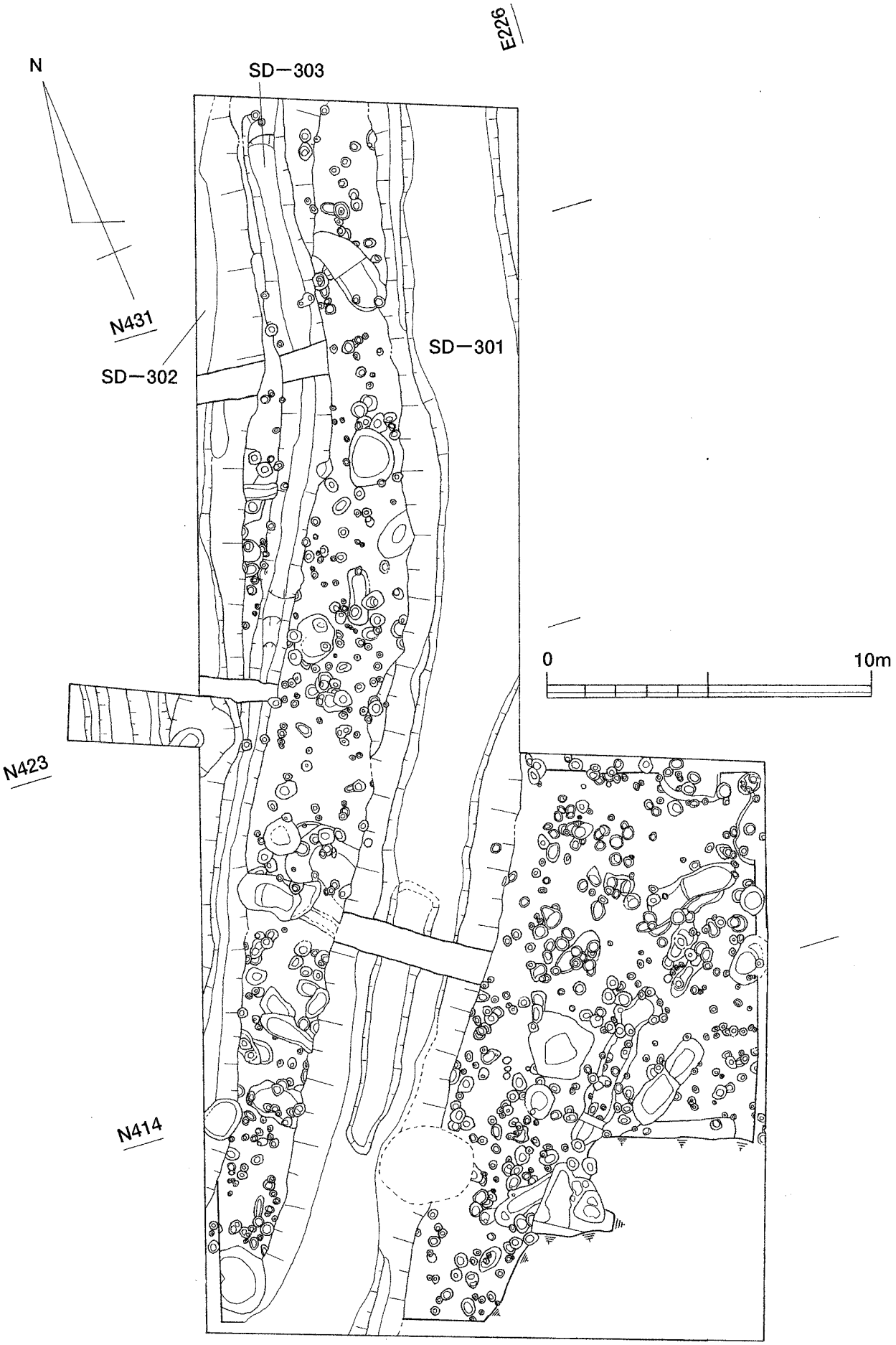
注３　『東奈良』－東奈良土地区画整理事業に伴う発掘調査概要報告－　平成15年３月31日　茨木市教育委員会

注４　『平成14年度発掘調査概報』　平成15年３月31日　茨木市教育委員会

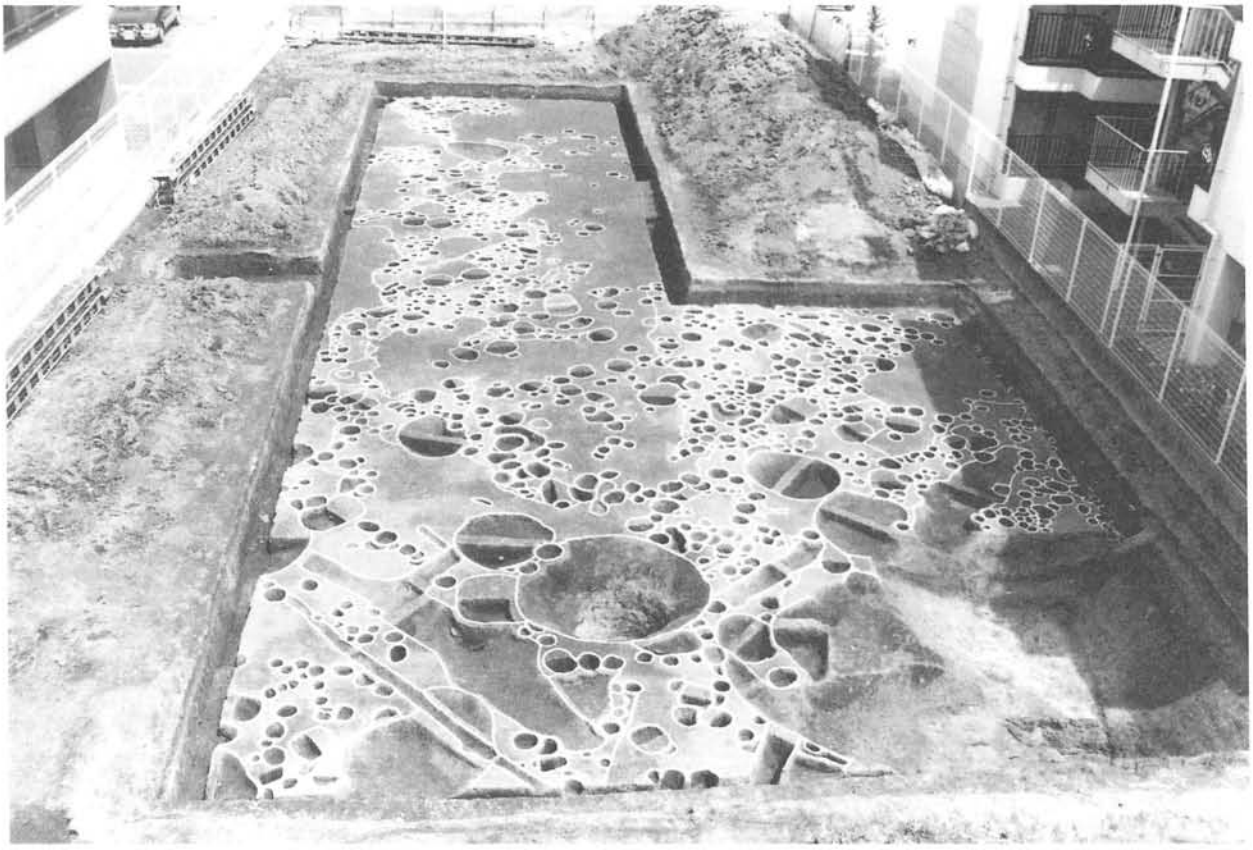
『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅱ』　平成２年11月26日　木耳社



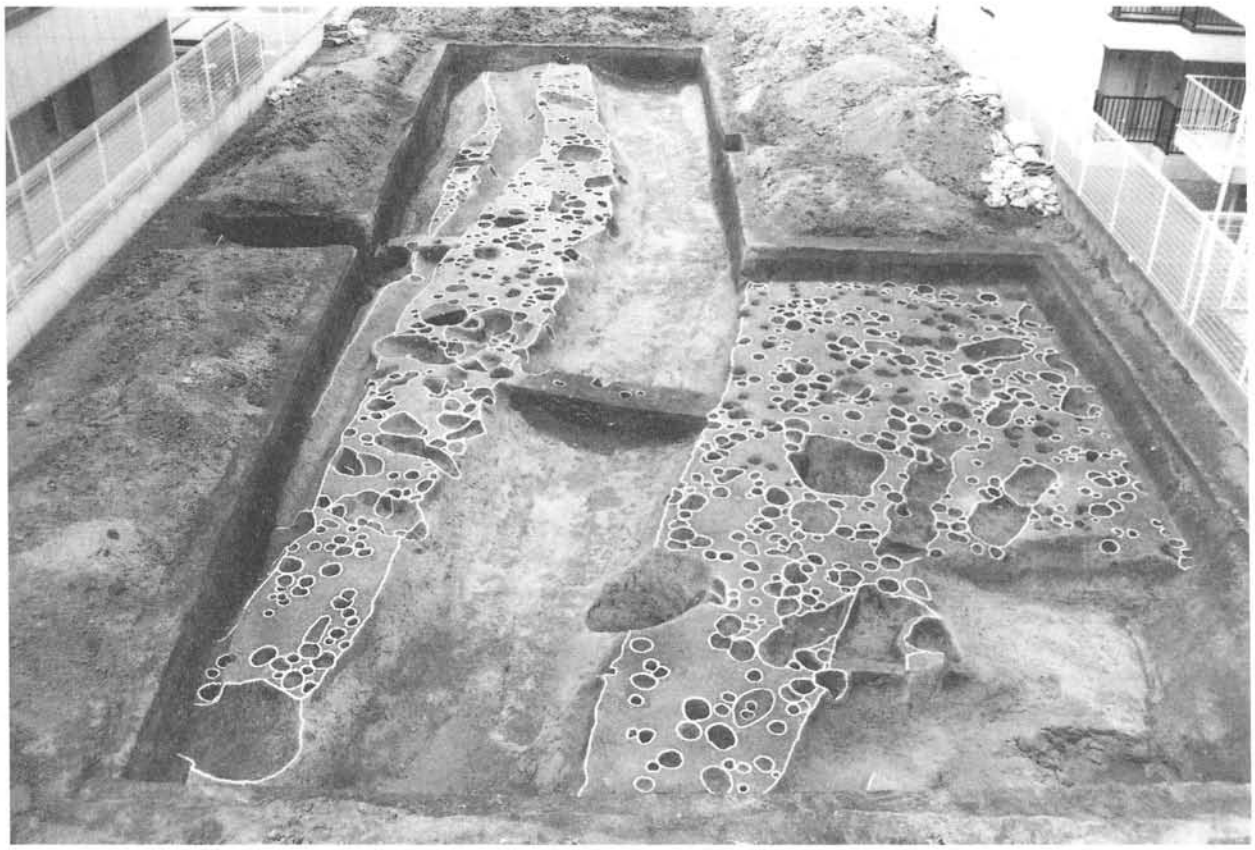
第27図　東奈良遺跡遺構平面図（第２遺構面）



第28図　東奈良遺跡遺構平面図（第３遺構面）



第２遺構図全景（南から）



第２遺構図全景（南から）

第29図　東奈良遺跡第２第３（最終）遺構面検出状況

最終遺構図　SD－301（環濠）完掘状況（南から）

最終遺構図　SD－302（環濠左）、SD－303完掘状況（環濠右）断面（南から）
第30図　東奈良遺跡各遺構検出状況

春日遺跡

所 在 地　茨木市西田中町285-１・286

開発事業　共同住宅建設事業

調査期間　平成15年６月５日～平成15年８月12日

調査面積　592㎡

調査担当　宮脇　薫

調査結果

今回の調査地は勝尾寺川と安威川の合流付近の勝尾寺川の右岸に位置している。北西には郡遺跡が、西の千里丘陵の裾野に穂積廃寺跡がある。

基本土層は、耕土、床土の次に、無遺物層の淡黄色土が約70～80㎝堆積しており、その下層に包含層である黒色土が15～25㎝の厚さで、調査地の北から南に向かって厚く堆積している。包含層には弥生時代中期（畿内第Ⅱ～Ⅳ様式）の土器が含まれている。包含層の下層の淡黄色粘土に遺構が検出された。

遺構面の地形は西北から南西に向かって下がっている。

遺構は、溝、土坑、柱跡である。

溝－Ⅰ

調査地の北で幅約42～70㎝、深さ約10～15㎝で半円形状に検出された。溝内より弥生時代中期（畿内第Ⅱ・Ⅲ様式）の土器が出土した。区画される範囲は約85㎡である。

溝－Ⅱ

調査地の南半部で途中で途切れた状態で検出された。幅は約60㎝、深さは約８～10㎝である。溝内より弥生時代中期（畿内第Ⅱ・Ⅲ様式）の土器が出土した。

溝－Ⅲ

調査地の南部で検出されたＬ字状の溝である。幅は約62㎝、深さ約12㎝である。溝内より弥生時代（畿内第Ⅲ様式）の土器が出土した。

土坑－Ⅰ

一辺が約２ｍ20㎝、深さ約35㎝の方形の土坑である。土坑内より弥生時代中期（畿内第Ⅱ・Ⅲ様式）の土器が出土した。

土坑－Ⅱ

短軸約１ｍ54㎝、長軸約２ｍ46㎝の不整形な楕円形で、深さは約56㎝で、底は舟底状になっている。土坑内より弥生時代中期（畿内第Ⅲ・Ⅳ様式）の土器と共に長方形の石包丁が出土している。

土坑－Ⅲ

調査区の西北端で検出された。短軸が約86㎝、長軸が約１ｍ12㎝の楕円形で、深さが約67㎝である。底は湧水帯の砂層を貫いており、調査時においても水が途切れることはなかった。内より弥生時代中期（畿内第Ⅲ様式）の土器が出土している。

土坑－Ⅳ

調査地の南部で検出された。短辺約１ｍ、長辺約２ｍ25㎝の隅丸の方形の土坑である。底は平坦になっており、底に接して板状の木材が出土している。

土坑－Ⅴ

短辺が約１ｍ２㎝、長辺が約２ｍ36㎝、深さが37㎝の長方形の形状で検出した。底は舟底状になっている。弥生時代中期（畿内第Ⅲ・Ⅳ様式）の土器が出土している。

柱跡

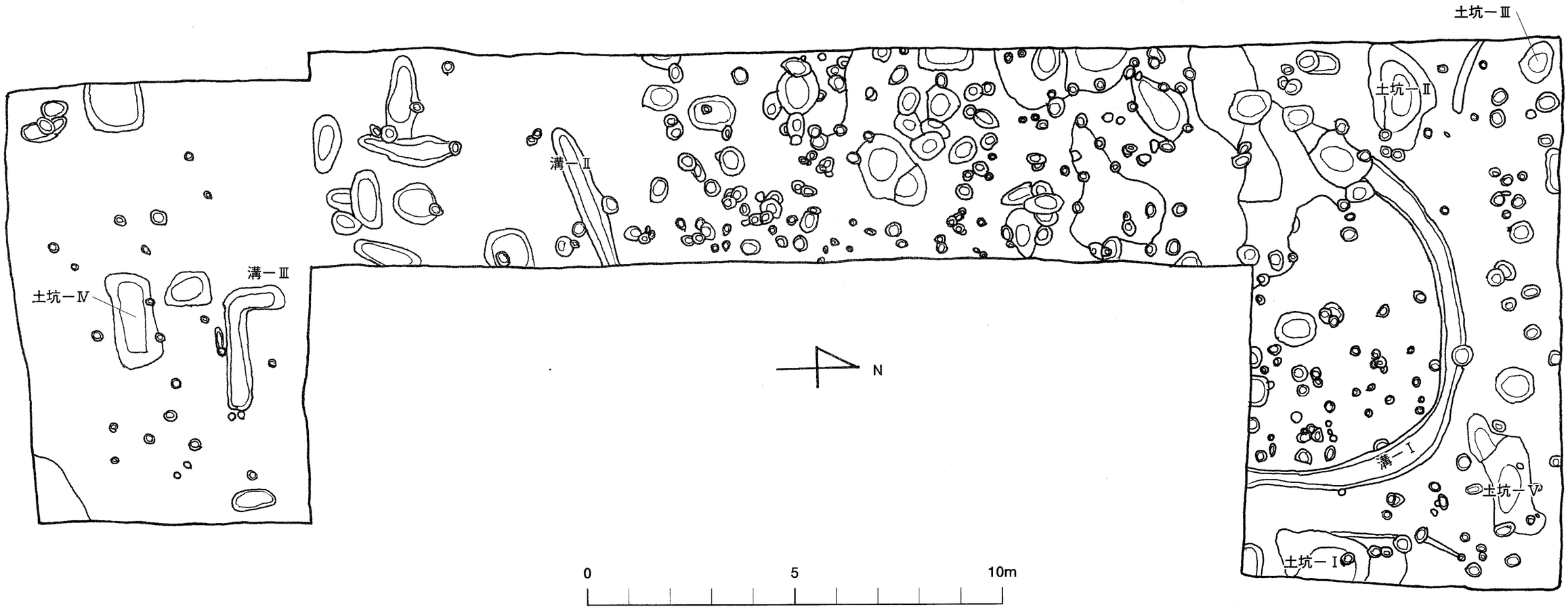
調査区の全域で検出された。柱跡は径が40～50㎝のものと、15～35㎝のもので、円形である。内より弥生時代中期の土器片が出土している。

まとめ

今回の調査によって出土した遺物は、包含層及び遺構から出土したもので弥生時代中期（畿内第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ様式）のものであり、当該地は同時代の集落域と考えられる。

溝－Ⅱより北には集落的様相がみられる。南での溝－Ⅲは方形周溝墓の一部とも考えられる。土坑－Ⅳは木棺墓の可能性がある。また、溝－Ⅱより南には数基の土坑墓の可能性も考えられるものもみられる。このことから溝－Ⅱは集落域と墓域とを分ける溝であると考えられる。

第31図　春日遺跡（東から）



第32図　春日遺跡遺構図

第33図　春日遺跡（北から）

第34図　春日遺跡（南から）

中条小学校遺跡

調査地位置図

所 在 地　茨木市新中条町55-１・57-１・57-２
開発事業　共同住宅建設事業
調査期間　平成15年６月27日～平成15年８月27日
調査面積　1,072㎡
調査担当　黒須　靖之
調査結果

中条小学校遺跡は昭和51年度に中条小学校改築に伴って発見された遺跡である。早くから市街地化していたこともあり、最近では再開発等に伴う発掘調査例が当該地域で増えている。この遺跡は、千里丘陵からのびる低位段丘と茨木川が形成した沖積面に立地し、弥生時代中期から中世にかけての複合遺跡として周知されている。

遺跡の範囲は南北約１㎞、東西0.4㎞であり、遺跡の南端は東奈良遺跡と重複する。今回の調査区は遺跡の南西隅に位置するため、東奈良遺跡からも近接した場所にある。調査地の遺構検出面の標高は（T.P.）11ｍを測る。周辺では平成９年度及び14年度に高層マンションを建設するために調査が実施されているが、今回の調査も共同住宅を建設するため、事前に発掘調査を実施したものである。

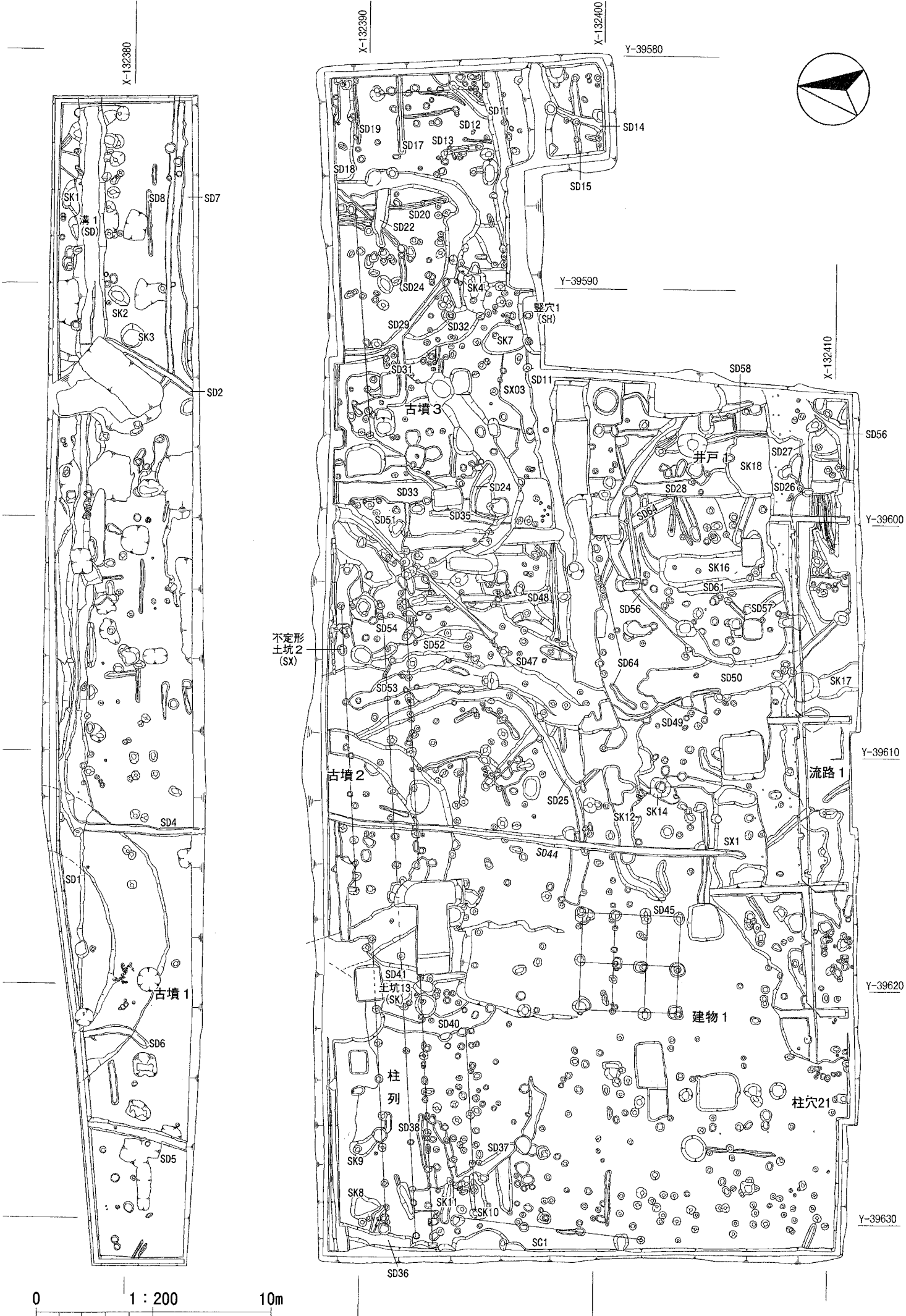
今回調査区の北側に隣接する平成14年度に調査が実施された場所では、主に弥生時代後期～古墳時代前期を中心とする溝・土坑等が検出されている。また、時期の特定が困難とされた、やや東に傾く主軸をもつ２間×４間の堀立柱建物跡が検出されている。さらに北西約50ｍに位置する平成９年度の調査では、古墳時代中期後半～後期頃の削平された古墳の周溝が検出されている。

調査は試掘調査を実施した結果、現地表面下約0.3～0.4ｍで遺構面及び遺物包含層に達したため、建築による掘削が及ぶ範囲を基本に調査区を設定した。また、調査は北と南に調査区を分割して反転調査とした。

調査の結果、弥生時代後期・後期後半～古墳時代初頭、古墳時代後期初頭～後期前半、飛鳥時代中頃（７世紀中頃）奈良時代後半～平安時代前期前葉（８世紀後半～９世紀前葉、）、平安時代後期（11世紀中葉～12世紀前半頃）の遺構（生活痕跡）が同一面（地山面）で検出され、まさに複合遺跡の様相を呈している。遺構の深度は平均30㎝前後の比較的浅いものが多いことから、それぞれの遺構掘り込み面は削平されていることがわかる。また、調査区北東隅では一部この地山面の上に層厚約10㎝程の中世遺物包含層が堆積しており、中世の遺構はこの面から検出された。

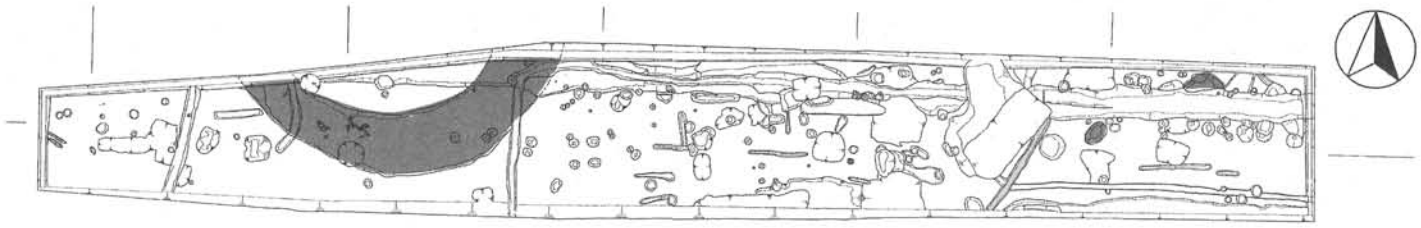
基本層序

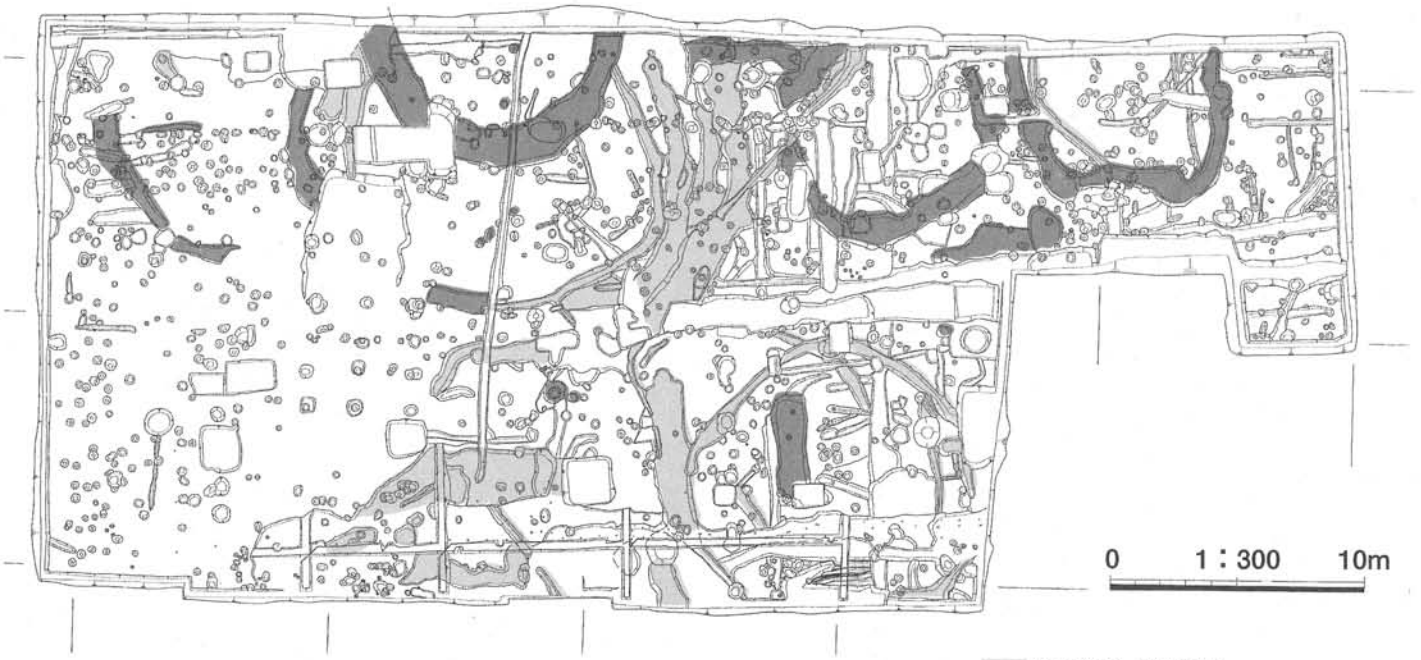
上から表土（盛土）20～30㎝、耕土10～20㎝、床土５㎝、黄褐色土（にぶい黄橙色シルトブロック含む。中世遺物包含層）10㎝、黄橙色粘質土（地山面）である。



0　1：200　10m

第35図　中条小学校遺跡調査区全体図（1）

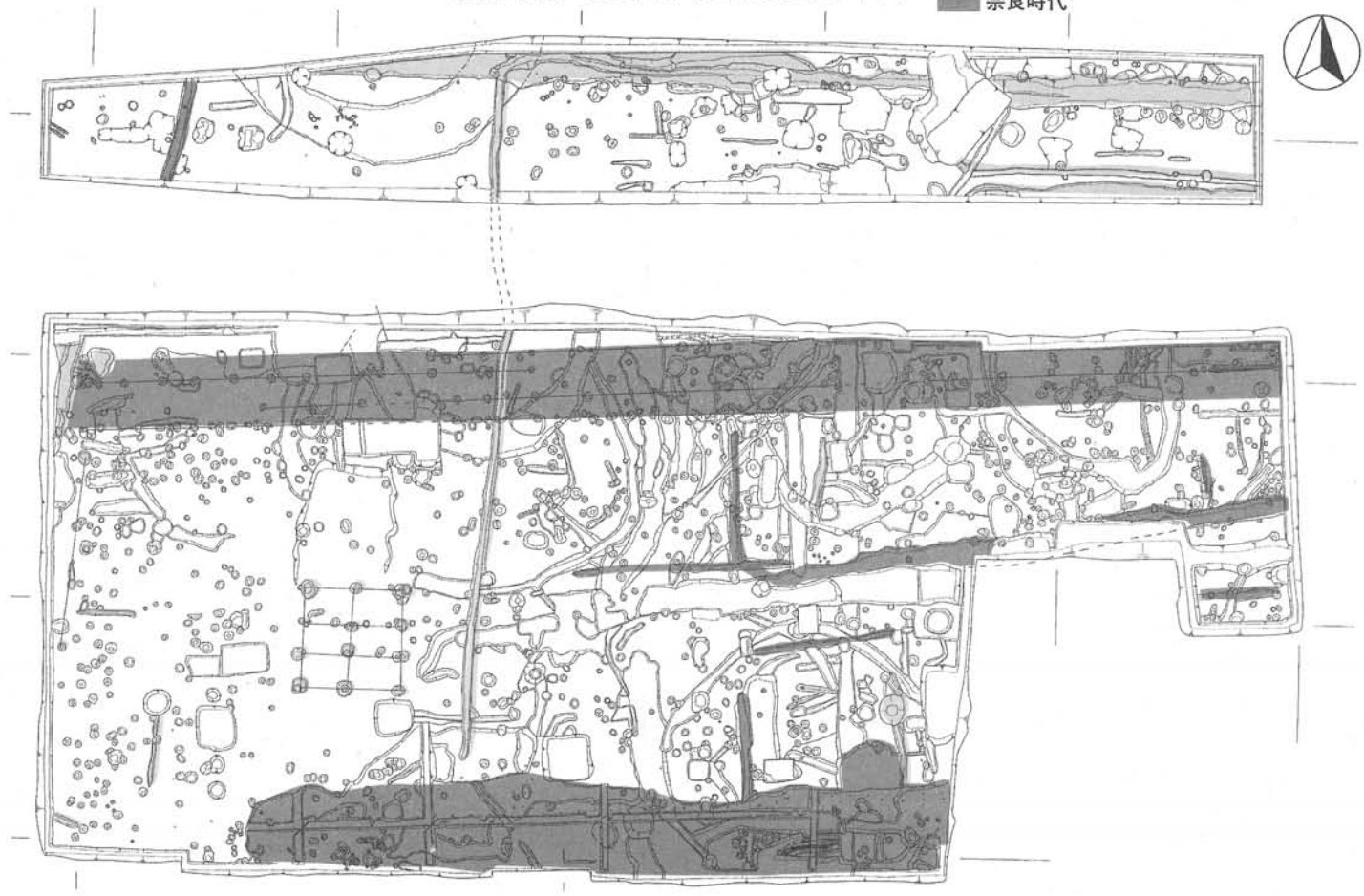




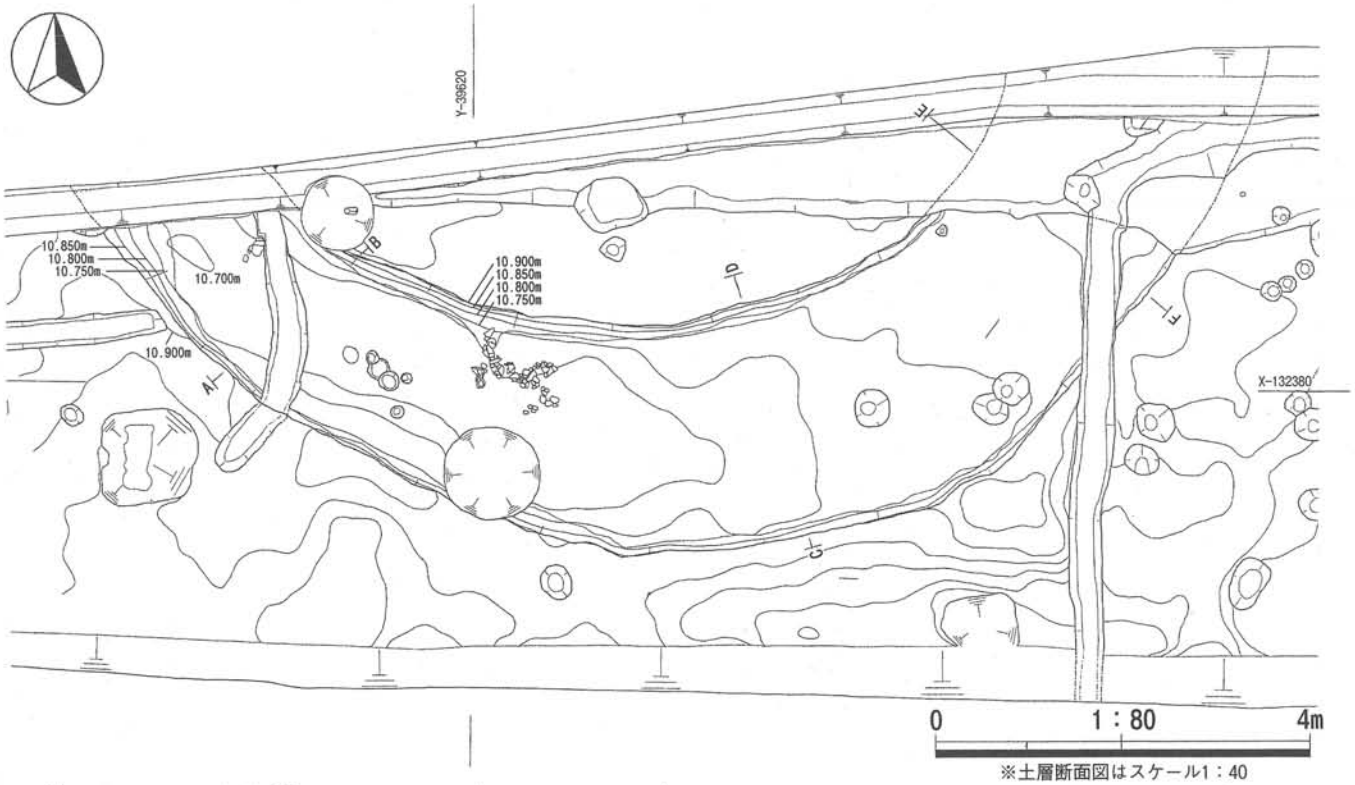
弥生時代・古墳時代遺構配置図（上）

飛鳥時代・奈良時代遺構配置図（下）

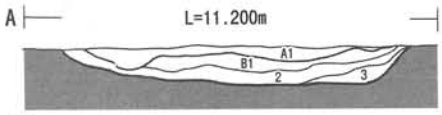
弥生時代～古墳初頭
古墳時代
飛鳥時代
奈良時代

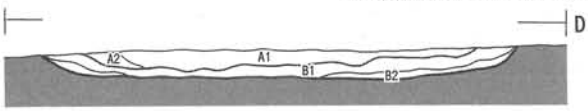


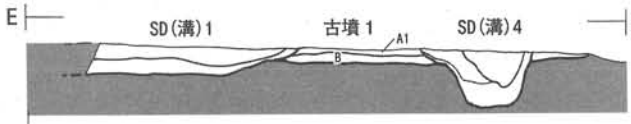
第36図　中条小学校遺跡調査区全体図（2）



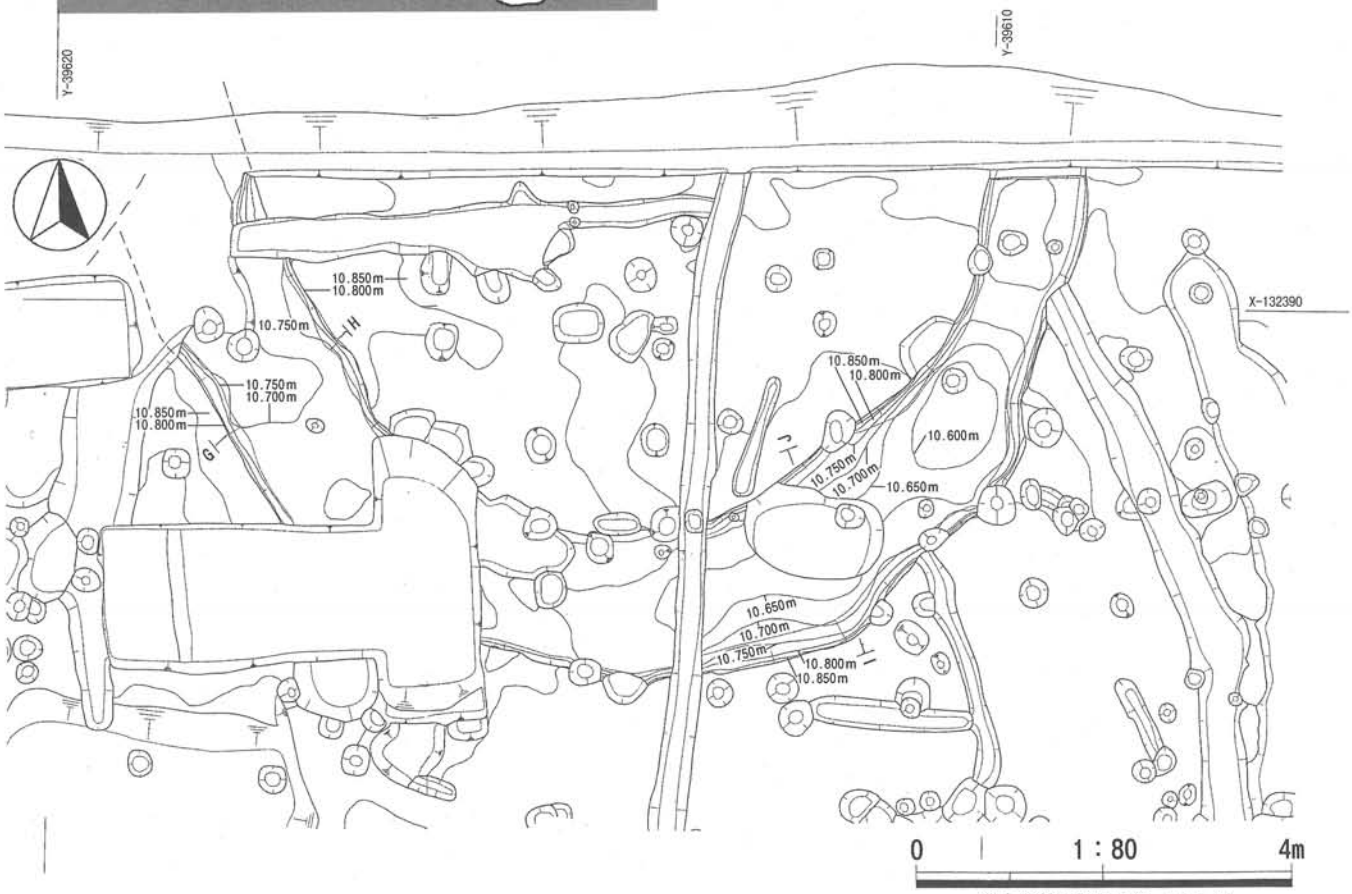
※土層断面図はスケール1：40



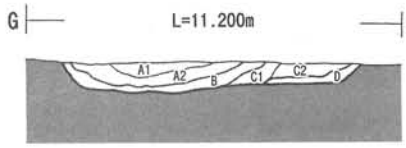


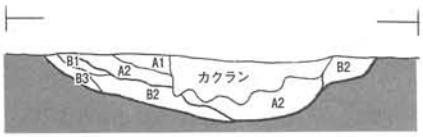


※古墳1　土層注記
A層：灰黄褐色粘性土に明黄褐色シルト混(HC10YR4/2・Sil10YR6/8)
B層：黒褐色粘性土に黄橙色シルト混(HC10YR3/2・Sil10YR7/8)



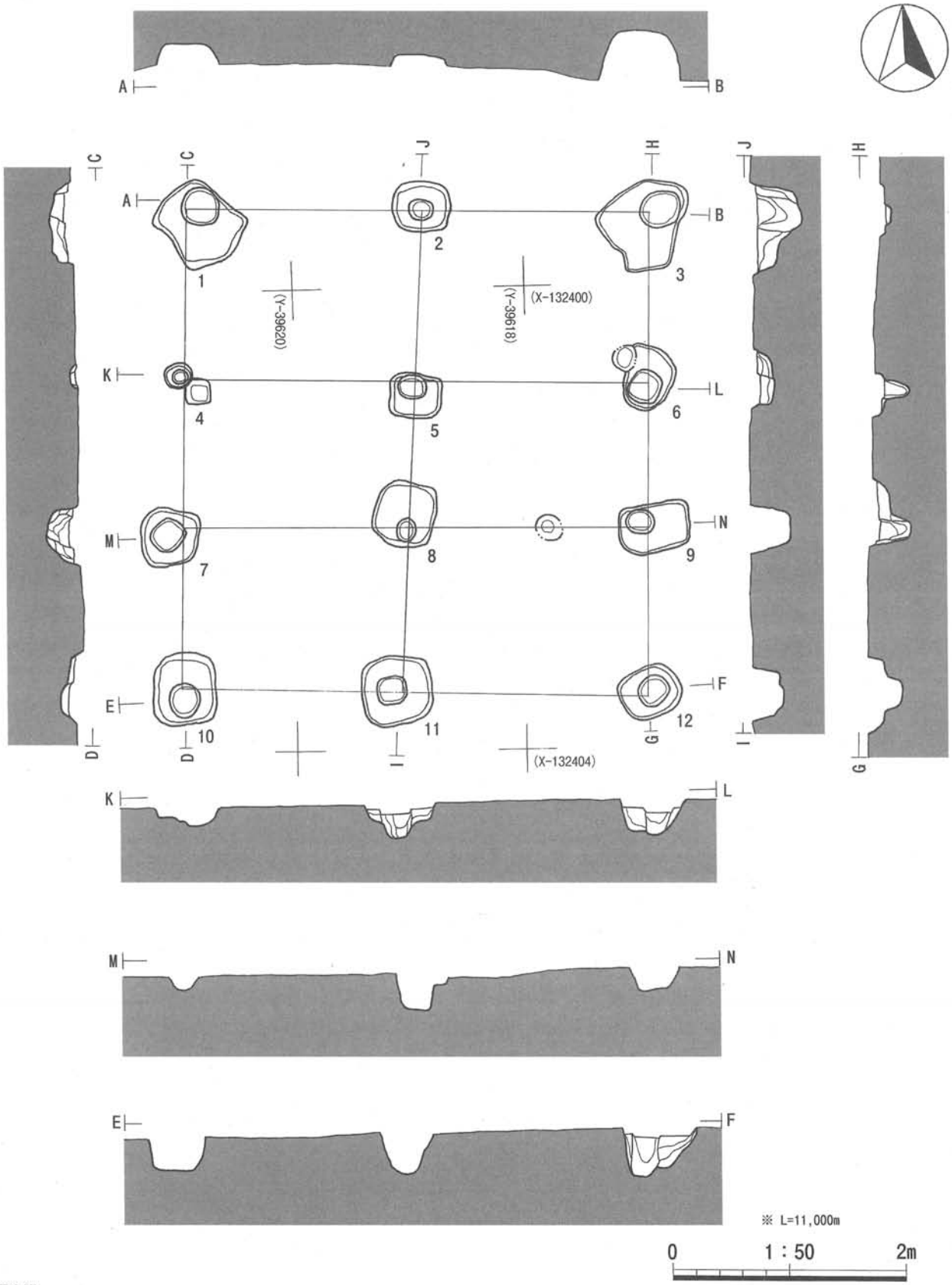
※土層断面図はスケール1：40





※古墳1　土層注記
A層：黒褐色土(Sicl10YR3/1・Sil10YR5/6)
B層：灰黄褐色土(Sicl10YR4/2・Sil10YR6/8)
C層：灰黄褐シルト(Sil10YR6/2・Sil10YR6/8)
D層：灰黄褐粘性土(HC10YR6/2)

第37図　古墳1（上）／古墳2（下）平・断面図



※土層注記

柱穴 1 黒褐色土に明オリーブ灰シルト混(SiCl10YR3/2./Si2.5GY7/1)
2 黒褐色粘性土に褐灰色シルト混(HC10YR3/2./Si10YR6/1)
3 黒褐色土に黄褐色シルト混(SiCl10YR3/2./Si10YR5/6)
4 黒褐色土
5 黒褐色粘性土に褐灰色シルト混(HC10YR3/2./Si10YR6/1)
6 黒褐色土に黄褐色シルト混(SiCl10YR3/2./Si10YR5/6)
7 黒褐色土に灰黄褐色シルト混(SiCl10YR3/1./Si10YR5/2)
8 黒褐色土に黄褐色シルトブロック混(SiCl10YR3/1./Si10YR5/8)
9 黒褐色土に黄褐色シルト混(SiCl10YR3/1./Si10YR5/8)
10 黒褐色土に黄褐色シルトブロック混(SiCl10YR3/1./Si10YR5/8)
11 黒褐色土に褐灰色シルト混(SiCl10YR3/2./Si10YR5/1)
12 黒褐色土に明黄褐色～黄褐色シルト混(SiCl10YR3/2./Si10YR5/6～6/8)

第38図　建物1　平・断面図

検出遺構（第36図）

弥生時代後期の主な遺構は土坑（ＳＫ－９・13・16・17）、ＳＸ－１（不定形土坑）、ＳＤ－51等がある。これら土坑の平面形はいずれも長楕円形で、深さは20～30cmと浅く埋土は黒褐色土を呈する。ＳＸ－１からは、有段口縁高坏（Ｖ様式）広口・細頸壺口縁等が出土している。弥生時代後期後半～古墳時代初頭の主な遺構は、円形周溝（ＳＤ－25・40・41・53・56）と、同じく円形周溝を呈すると思われる溝等（ＳＤ－37・47・50・64）がある。ＳＤ－32は方形周溝であると思われる。いずれも溝の幅は１ｍを越えるものはなく、浅いものがほとんどである。

これら溝からはまとまった遺物の出土は見られず、土器は破片が多い。個々の溝が掘削された時期については、資料が限定されるため困難であるが、円形周溝（ＳＤ－56）及び方形周溝（ＳＤ－32）からはタタキを施した甕の底部や高坏、壺口縁部が出土していることから、弥生時代後期後半～古墳時代初頭頃（庄内式併行期）と推測される。また、ＳＤ－56はＳＤ－64と交差しており、新旧関係を比較するとＳＤ－64の方が古い時期の遺構である。概ねこの時期前後にこれらの溝が構築されたものと推察される。

古墳時代後期前半（６世紀初頭～前半）に属する遺構は、削平された古墳－１、－２（円墳）古墳－３（方墳）の計３基を検出している。

古墳－１からは円筒埴輪や須恵器、古墳－２からは須恵器、古墳－３からは円筒埴輪が出土している。

古墳－１（第38図）は北調査区の西側で検出されており、全体の３／５は北側の調査区外へのびている。推定される古墳の墳丘規模は約８ｍであり、周溝の幅は1.8～2.7ｍ、深さは10～20cmを測る。周溝を含めた古墳の直径は約13ｍ前後と思われる。溝の浅さからもわかるように著しく削平を受けており、主体部である埋葬設備は検出できなかった。溝の埋土は大きく２層に大別でき、Ａ層は灰黄褐色粘性土でＢ層は黒褐色粘性土である。出土遺物（第40図）は周溝内のＢ層から検出されており、円筒埴輪や須恵器甕、装飾器台と思われる破片がある。

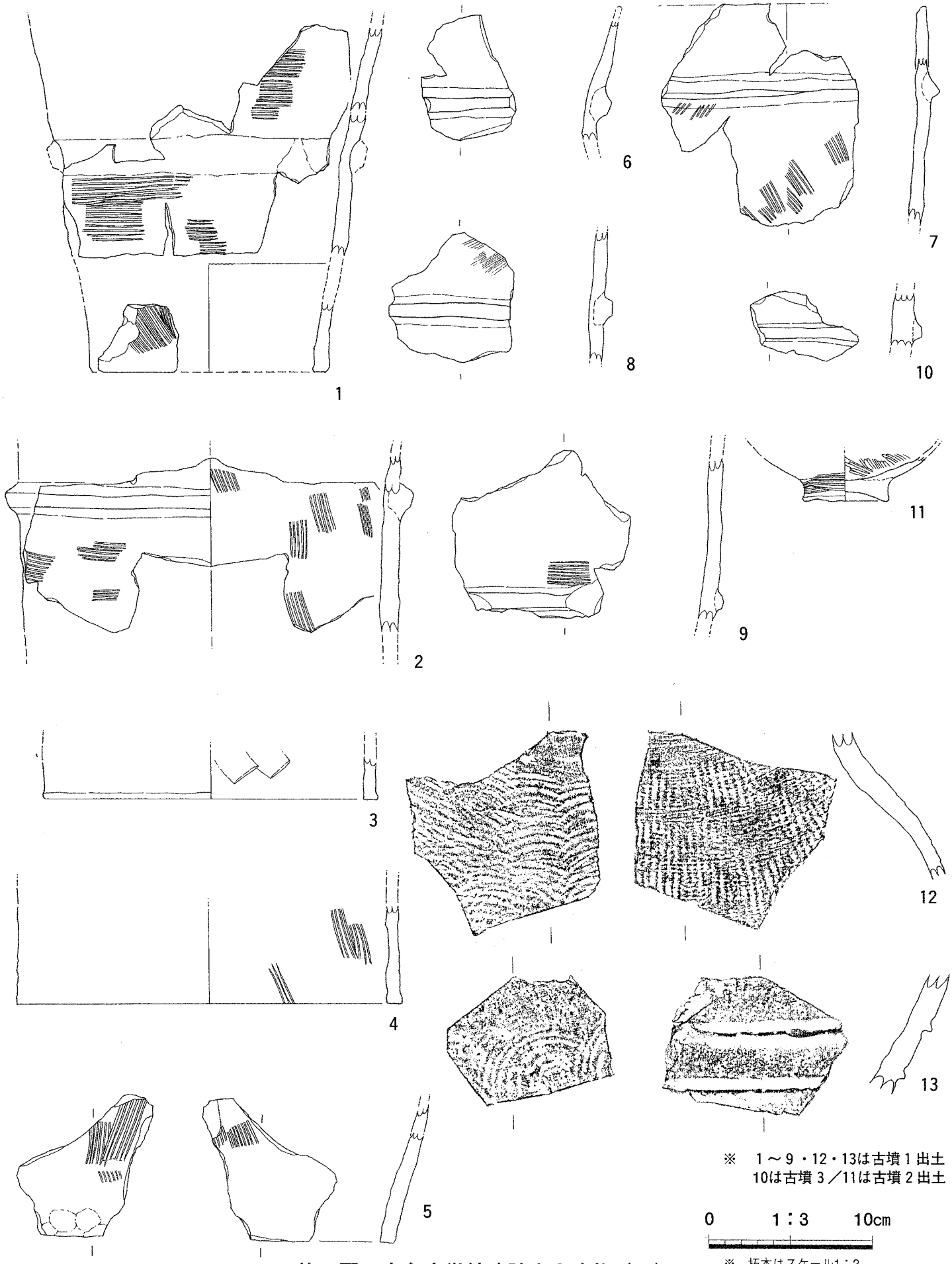
古墳－２は南調査区の西側で全体の１／２を検出しており、古墳－１に隣接する。古墳の墳丘規模は約９ｍで、周溝の幅は0.9～1.7ｍ、深さは10～30cm を測る。周溝を含めた古墳の直径は約10～11ｍと思われる。古墳－１と同様に著しく削平を受けており、主体部である埋葬施設は検出されなかった。溝の埋土は大きく４層に大別でき、Ａ層は黒褐色土、Ｂ層は灰黄褐色土、Ｃ層は灰黄褐色シルト、Ｄ層は灰黄褐色粘性土である。

出土遺物（第41図）は周溝内のＢ～Ｄ層中から検出されており、須恵器甕の口縁部、坏身や土師器甕底部等がある。その形態から６世紀前半代（須恵器編年ＭＴ15）に収まるものと思われる。

古墳－３は南調査区の東側で全体形がほぼ検出されており、墳形は方墳を呈する。古墳の墳丘規模は6.0×6.8ｍで、周溝の幅は0.65～1.3ｍ、深さは30cm を測る。周溝を含めた古墳の直径は8.4×8.9ｍである。古墳－１・２と同様に削平を受けており、埋葬施設は検出されなかった。溝の埋土は大きく２層に大別でき、Ａ層は黒褐色土、Ｂ層は灰黄褐色土である。出土遺物は円筒埴輪が出土している。また、土坑（ＳＫ－２・12・14）や不定形土坑（ＳＸ－２・３）、柱穴が検出された。

飛鳥時代（７世紀中頃）及び奈良時代後半～平安時代前期（８世紀後半～９世紀前葉）の遺構は区画溝（ＳＤ－１・２・４・５・７・８・10～13・26・27・36・44・48・58・61）や流路（ＳＲ－１）、建物跡（ＳＢ－１）、柱列群（ＳＣ－１等）、井戸（ＳＥ－１）、雨落溝、土坑（ＳＫ－８・18）等で構成されている。

ＳＢ－１及びＳＣ－１、ＳＤ－１・７・８・13・36・44・58、ＳＥ－１、ＳＫ－８は建物や溝の主軸がほぼ真北方向で統一されており、出土した遺物から同時代の遺構と考えられる。また、ＳＤ－36から須恵器坏身、ＳＥ－１からは須恵器高坏蓋（宝珠つまみ付）坏身が出土しており、いずれも７世紀中頃（ＴＫ－217～46）のものと思われる。遺構をみると、ＳＤ－１は東西方向に50ｍ以上のびており、幅は１～1.5ｍを測る。深さは14～34cmで東側に向かって溝が約20cm程

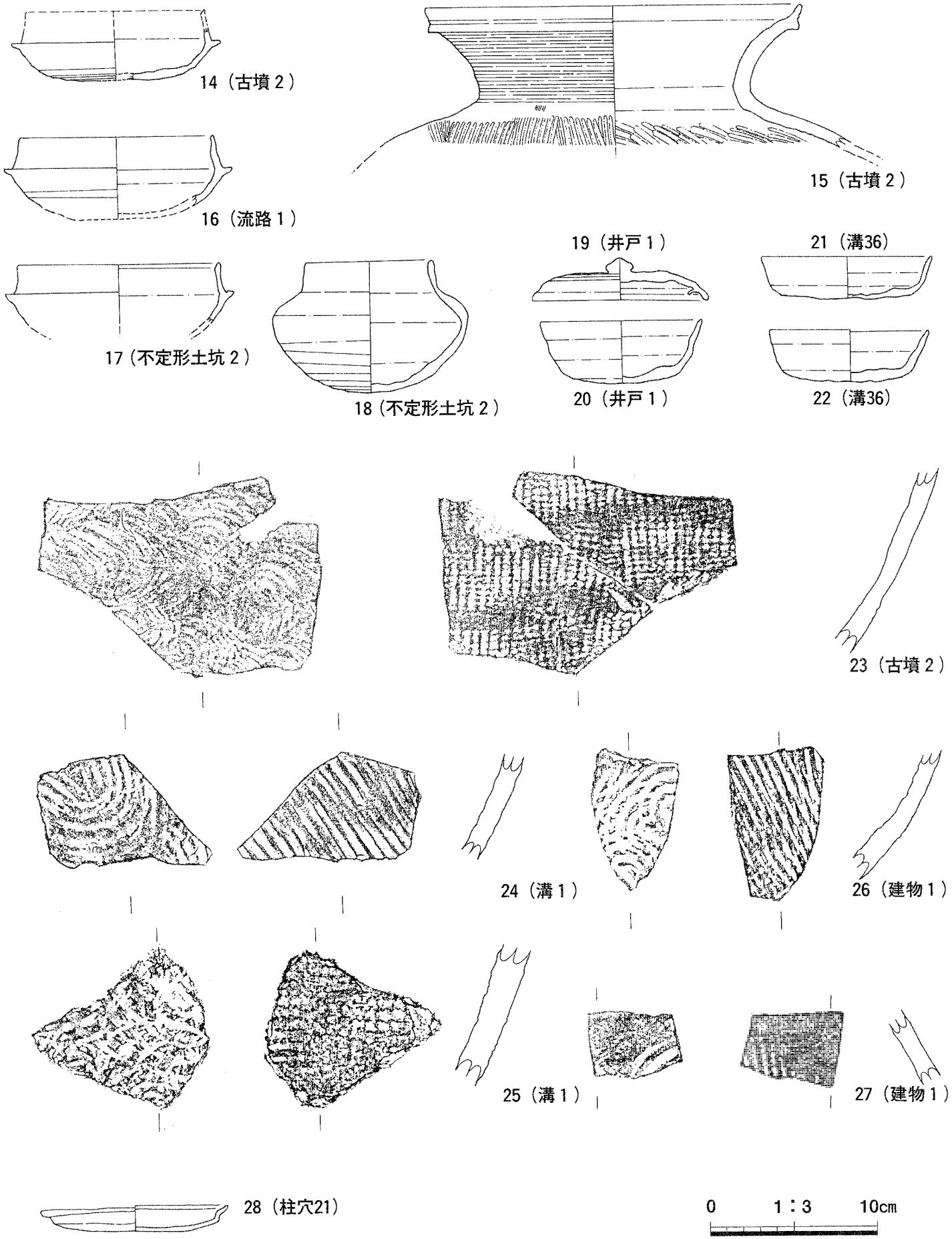


※　1～9・12・13は古墳1出土
10は古墳3／11は古墳2出土

0　1：3　10cm

※　拓本はスケール1：2

第39図　中条小学校遺跡出土遺物（1）



※　拓本はスケール1：2

第40図　中条小学校遺跡出土遺物（２）

深くなっている。埋土は３層に大別でき、上層は黄褐色シルトを多く含む灰黄褐色土、中層は灰黄褐色土、下層は褐灰色粘性土である。水が流れた痕跡が認められるため、区画溝であると同時に水路としての機能も併せ持っていたと推察される。また、ＳＤ－４・44はＬ字状にのびる溝であり、南北方向に28.5ｍ、東西方向に31.5ｍを測る。東西方向の溝はＳＤ－１と合流する形で重複しており、新旧関係はＳＤ－４･44の方がＳＤ－１より新しい。溝の幅は0.3～0.4ｍ、深さは23～34㎝である。南北方向の溝の底面は平坦であるが、合流部直前で若干深くなっている。埋土は２層に大別でき、上層は灰黄褐色土、下層は褐灰色粘性土である。溝の断面形はＳＤ－１がＵ字及び逆台形であるのに対して、ＳＤ－４・44は完全な箱掘りである。ＳＣ－１は南調査区西端に位置しており、ＳＤ－36と１ｍの距離を保って平行に伸びている。間尺は約2.5ｍである。ＳＢ－１はＳＤ－44の2.5ｍ西側に位置し、２間×３間の総柱建物である。建物規模は南北4.2ｍ、東西約4.1ｍであり、柱配列は正方形を呈する。柱穴は概ね長方形で堀方長軸0.46～0.78ｍ、短軸0.38～0.66ｍ、深さは10～46㎝である。柱材は腐食して残っておらず、平面形は一辺0.3ｍ前後を測る方形を呈する可能性がある。芯－芯距離は南北が1.5－1.25－1.5ｍ、東西が2.05ｍを測る。埋土は黒褐色土に黄褐色ブロック等が混ざる。遺物は須恵器甕・瓶、土師器片等がすべての柱穴から出土している。また、ＳＤ－10・11・26・48・61や南調査区北壁際に東西方向にのびる柱列群は、主軸がやや南に振れている。遺物の出土が僅少であることから、これら遺構群の明確な時期は不明であるが、ＳＤ－５・10・11・26、ＳＫ－18からは概ね奈良時代後半～平安時代前期（８世紀後半～９世紀前葉）頃の須恵器坏蓋・身・土師器等が出土している。平安時代後期（11世紀中葉～12世紀前半頃）の遺構としては、溝（ＳＤ－28・33）や建物を構成する柱穴群が検出されている。中世の主な遺構群は、鋤溝や柱穴である。

出土遺物（第40・41図）

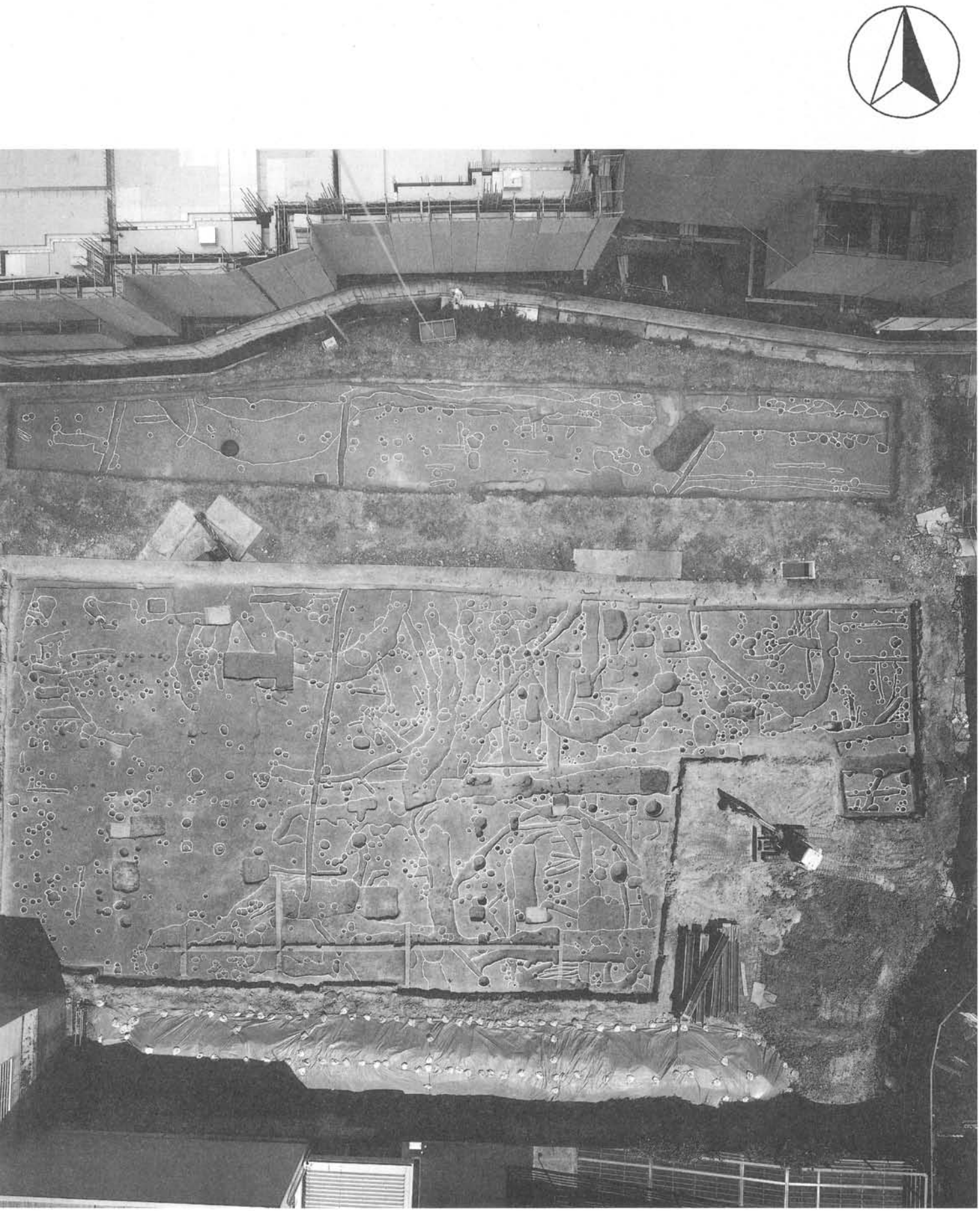
１～９は古墳－１、10は古墳－３出土の円筒埴輪で、いずれも器面の摩滅が多くみられる。器面調整は外面がヨコハケ、内面は斜め～タテハケを施す。色調は浅黄色～橙色を呈しているが、５のみ外面に黒斑が見受けられる。突帯は断面台形を呈するものが多い中で、７のみ三角形を呈している。底径は25㎝を越えるものはなく、小型品が多いうえに外面２次調整の簡略といった傾向が見られる。11は古墳－２出土の土師器底部である。12は須恵器甕、13は須恵器器台の破片である。14・15は古墳－２出土の須恵器坏身、甕の口縁部である。16・17も須恵器坏身、18は須恵器短頸壺である。19は宝珠つまみのついた須恵器坏蓋で、20～22は須恵器坏身である。23～27は須恵器甕である。25は外面がやや大きい格子目タタキが施される。１～18は概ね６世紀初頭～前半、19～22は７世紀中頃のものと思われる。

まとめ

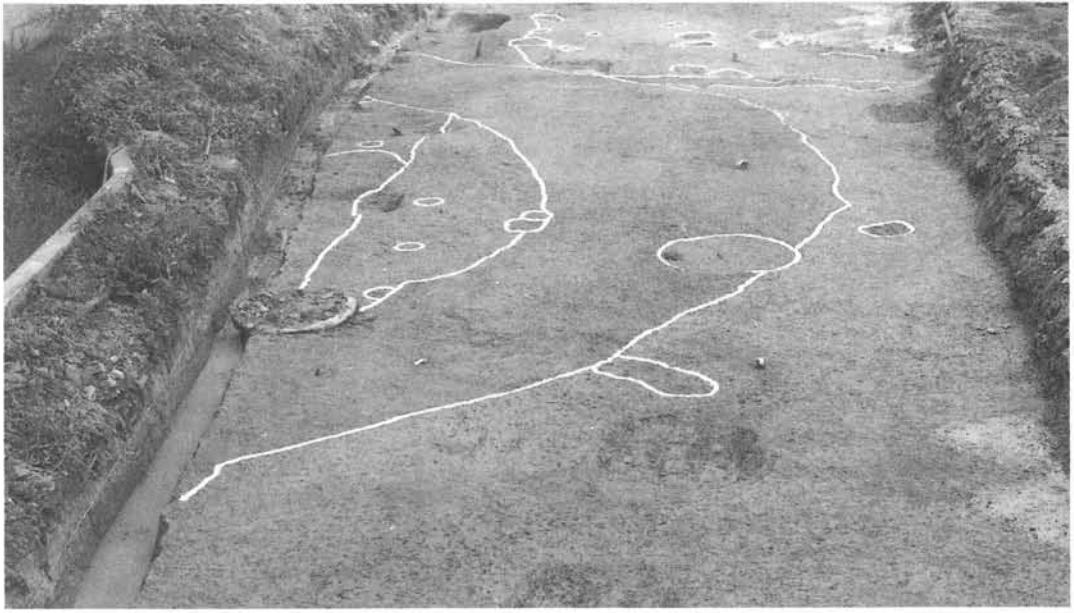
弥生時代後期の遺構を確認したほかに、後期後半から古墳時代初頭（庄内併行期）に移行する時期のものと思われる円形周溝を中心とした遺構群が多数検出された。近接する東奈良遺跡においても、この時期の大溝や集落が存在することや中条小学校の西北西約200ｍ地点（Ｈ12年度調査）及び今回の調査区から約800ｍ隔てた市役所南側の調査（Ｈ12）においても、時期・性格・特徴等が類似した遺構が確認されていることから元茨木川右岸沿いには、この時期の円形・方形周溝を中心とした遺構群の選地が想起される。

６世紀初頭～前半には墳長約10ｍ前後の円墳や方墳が築かれたようである。府営住宅建替えで平成７～８年度に大阪府教育委員会が調査を実施した安威川左岸の低位段丘上の総持寺遺跡では５世紀中頃～後半の古墳群が発見されており、１基の円墳と34基の方墳を有する方墳主体の古墳群が確認されているが、春日・駅前・中条小学校遺跡の所在する元茨木川右岸地域の沖積地では５世紀後半～６世紀前半の円墳の発見が多いようである。

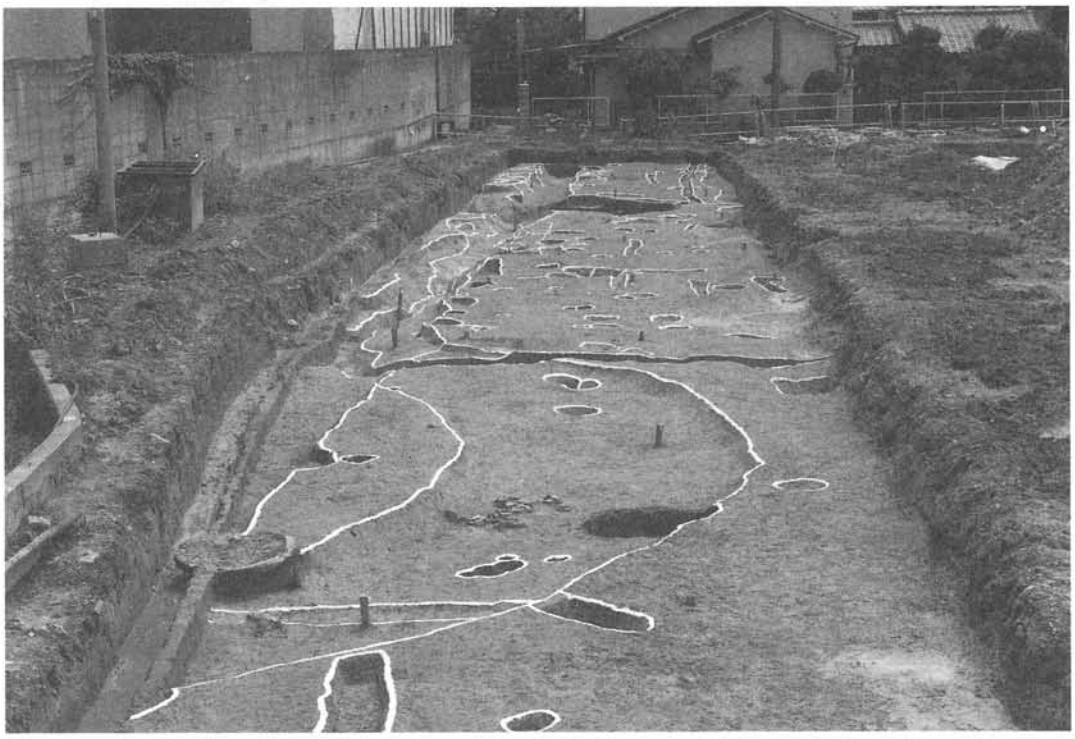
また、当該地域において飛鳥時代中頃、奈良時代後半～平安時代前期の区画溝や建物跡、柱列群、井戸、流路等を理路整然と計画的に配置したことが窺える。さらに、古代に構築された遺構が現代の道路・水路等の土地利用に少なからず作用していたことが推察される。なお、柱列群に関しては建物となる可能性が高いものの慎重に検討を要するものと考えている。



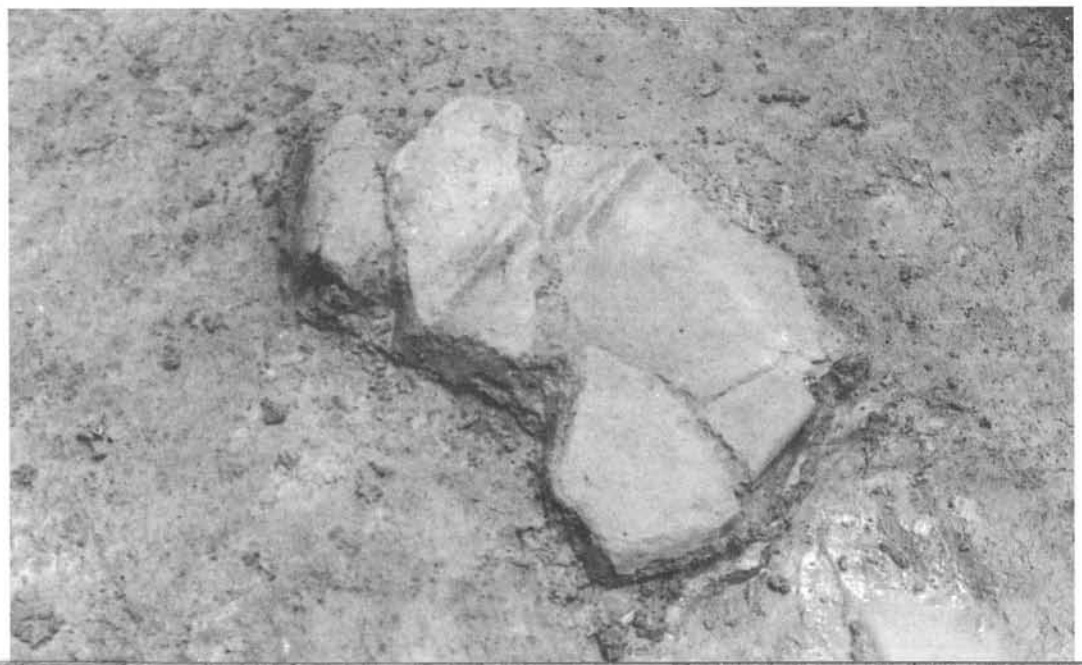
第41図　中条小学校遺跡調査区全景（真上から）



1. 古墳1
検出状況
（西から）



2. 古墳1
完掘状況
（西から）



3. 古墳1
出土遺物
（南から）

第42図

4. 古墳２及び
建物１全景
（北東から）

5. 建物１
全景
（東から）

6. 建物１
全景
（北から）

第43図

東奈良遺跡

所 在 地　茨木市東奈良三丁目地内
開発事業　道路敷設事業
調査期間　平成15年６月30日～平成15年９月８日
調査面積　364㎡
調査担当　中東　正之
調査結果

平成10年12月から12年３月にかけて、東奈良遺跡の中心部である東奈良二・三丁目、若草町の一部において、区画整理事業と都市計画道路阪急南茨木駅平田線工事に先立つ発掘調査が行われた。その結果、弥生時代の環濠集落の様相が更に明らかとなってきた。その後も当地区では、マンション建設などに伴う発掘調査が行われており、環濠の内外からは多数の遺構・遺物が検出されている。

今回の調査地である都市計画道路阪急南茨木駅平田線の未通区間は、阪急京都線に平行し、中央環状線側道に合流するもので、ＪＲ貨物線高架下道路から阪急南茨木駅までの区間である。当該区間では、すでに一部の発掘調査が完了しており、残るＪＲ貨物線高架下道路に接する約30ｍの区間（北側調査区）と、南茨木駅に接する約25ｍの区間（南側調査区）が調査対象である。

遺構・遺物

北側調査区

前面道路からの進入路となっており、道路面並に盛土がなされていた。盛土を除いた耕土面は、標高7.7ｍを測る。上層より、耕土（約10㎝）、床土（約５㎝）、中・近世包含層である褐灰色粘質土（20～30㎝）となる。以下、奈良時代の整地層である黒褐色粘質土（約30㎝、北部では欠如）、弥生時代中期後半～古墳時代前期初頭の包含層である黒褐色土（30～50㎝・第１遺構面）、弥生時代前期～弥生時代中期前半の包含層である灰黄褐色粘質土（20～30㎝・第２遺構面）、地山層の明黄褐色粘土（第３遺構面）となる。各遺構検出面の標高は、南に向かって下がっており、第３遺構面で6.8～6.1ｍを測る。

第１遺構面では、中世期とみられる井戸状遺構と、これに連なる溝１条、ピット４基を検出した。井戸状遺構は、上面形円形で、直径1.5ｍを測る。深さは0.9ｍと浅く、井戸枠も存在しなかったため、土坑であったとも考えられる。遺物はごくわずかである。

第２遺構面では、主に弥生時代中期後半の遺構を検出した。同後期から古墳時代前期初頭の遺構も混在する。ＳＸ－01・02は、深さ20㎝程度の浅い落ち込みである。どちらも調査区外に至るため全容は不明であるが、ＳＸ－01は、下層の前期環濠と重なる上面形を呈する。ＳＸ－02は、

東西方向の溝状で、幅2.2から４ｍを測る。埋土はどちらも黒褐色土の単一層で、弥生時代中期後半頃に比定される。周溝状に連なるものと予測されたが、確認し得なかった。他に小規模の溝３条、土坑５基、柱穴･ピット約280口がある。遺構は密であるが、建物などは検出されなかった。

第３遺構面では、環濠３条をはじめとして、弥生時代前期後半から中期初め頃の遺構を検出した。ＳＤ－05は、３条の環濠のうち内側を廻るものである。北肩部は調査区外に至るが、推定幅約４ｍ。深さ約1.4ｍを測る。二段の堀形の下段は断面Ｖ字型を呈する。

埋土は７層ほどに分かれる。その下層は、南肩部すなわち集落外側から地山ブロックが混入し、畿内Ⅰ様式中段階の弥生土器が出土した。中～上層は、埋没したあと、弥生時代中期以降に攪乱が及んでいるが、原初の埋土からは、畿内Ⅰ様式新段階頃の土器や動・植物遺体、炭化物などが出土している。

ＳＤ－06は、外側を廻る環濠である。やや幅広の約５ｍ、深さ約１ｍを測る。二段の堀形を有し、下段の断面はＵ字形を呈している。埋土はやや湿潤で８層程に分けられる。下層遺物は畿内Ⅰ様式中段階から新段階であるが、中～上層遺物も、あまり時期差はみられない。南肩部は湧水層である砂層が露頭し、溝埋土として混入する。植物遺体も多く遺存しているが、恒常的に流路として機能していたものではない。

ＳＤ－07は、ＳＤ－05の南側（外側）を近接して廻る小規模の環濠で、幅1.1～1.4ｍ、深さ0.7ｍを測る。埋土は２層に分かれ、畿内Ⅰ様式新段階の土器が出土している。他に、小規模の溝７条、柱穴・ピット約290口がある。

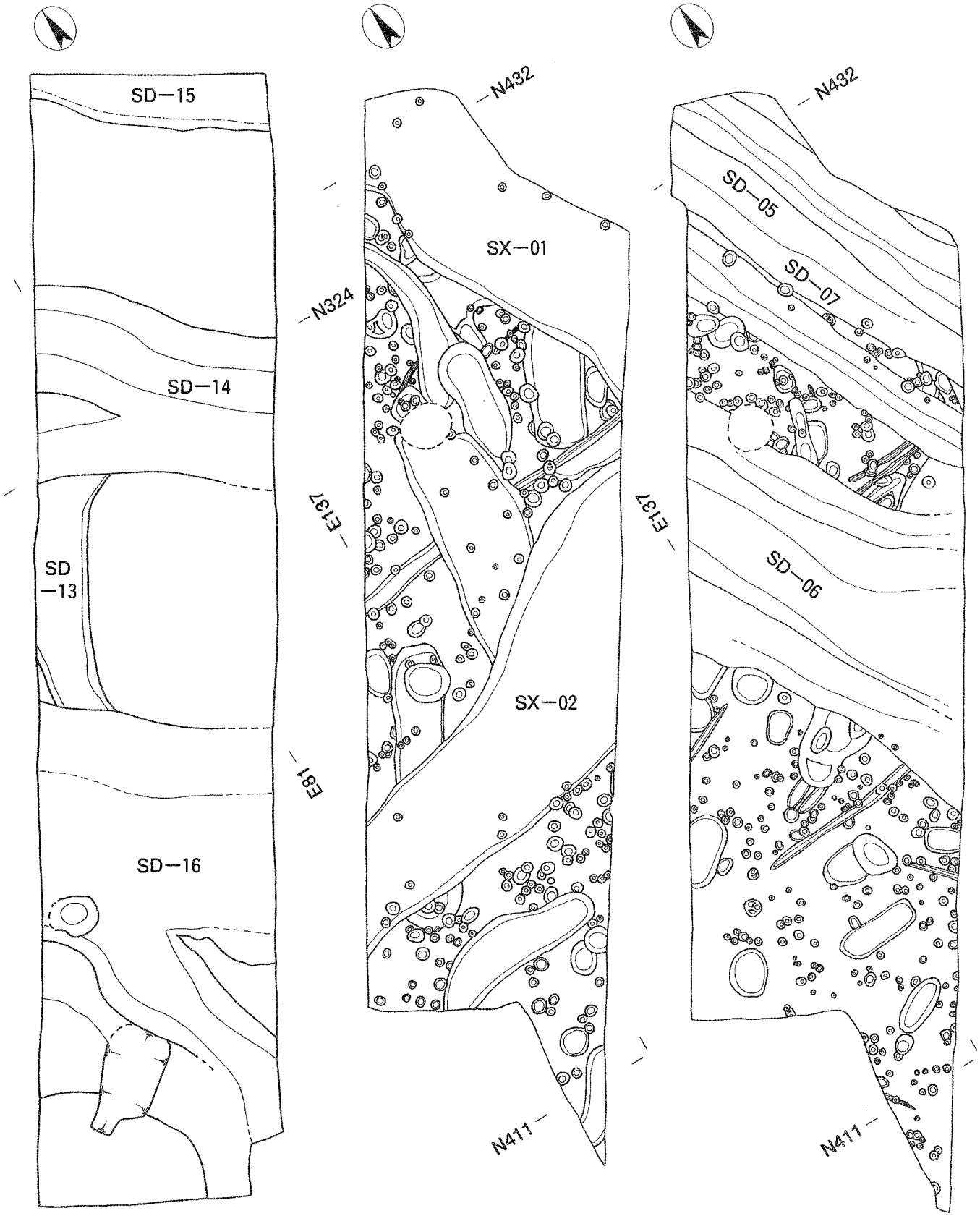
遺物は、整理箱で68箱出土した。内容は、弥生時代前期後半から古墳時代前期初頭の壺、甕、甑、高坏、器台などの土器類を主体に、石器・石材、動・植物遺体のほか、奈良時代の土師器、須恵器、そして中世土器などである。

南側調査区

中央環状線側道との接続部分である。当地区の旧地形は、現在の中央環状線下が谷地形を呈しており、周辺の流路は、この谷に向かって注いでいた。調査区の現地表面は標高7.6ｍを測る。表土を除去すると、北側調査区から普遍的に続く、中・近世遺物を含む褐灰色砂質土となる。以下、ごくわずかに須恵器・土師器等を含む、シルト質土・粘質土の水平堆積が５層ほど続くが、標高6.6ｍ付近の削平面を境に、以下は、埋没流路の影響で、湿潤で複雑な堆積状況となる。
遺構検出は、この削平面で実施した。

当初の遺構面精査では、方形周溝墓群である可能性も考えられたが、その溝状の堆積は、埋没流路の埋土上層に該当していることが判明したため、流路の底面までいっきに掘り下げた。その結果、４条の流路・溝を検出した。

ＳＤ－16は、自然流路である。西から東への流れと、北西から南東への流れの分岐する地点と思われる。溝幅は９ｍ。深さ1.5ｍを測る。埋土は15層以上が複雑に堆積し、各層から、弥生中期後半の摩滅した土器片が出土した。中～上層では、弥生時代後期、最上層では古墳時代前期初頭の土器片が混入する。層位的にみて、その埋没の過程で規模を縮小しながら、長時間存続して



南側調査区　　北側調査区第２面　　北側調査区第３面

0　5m

第48図

いたことを示す。

ＳＤ－14は、北西から南東向きに流れる流路である。北肩部が大きく削平されているが。推定幅５ｍ、深さ1.7ｍを測り、底部の断面はＵ字型を呈する。埋土は15層程に分かれ、各層より弥生中期後半から同後期の土器片が出土した。

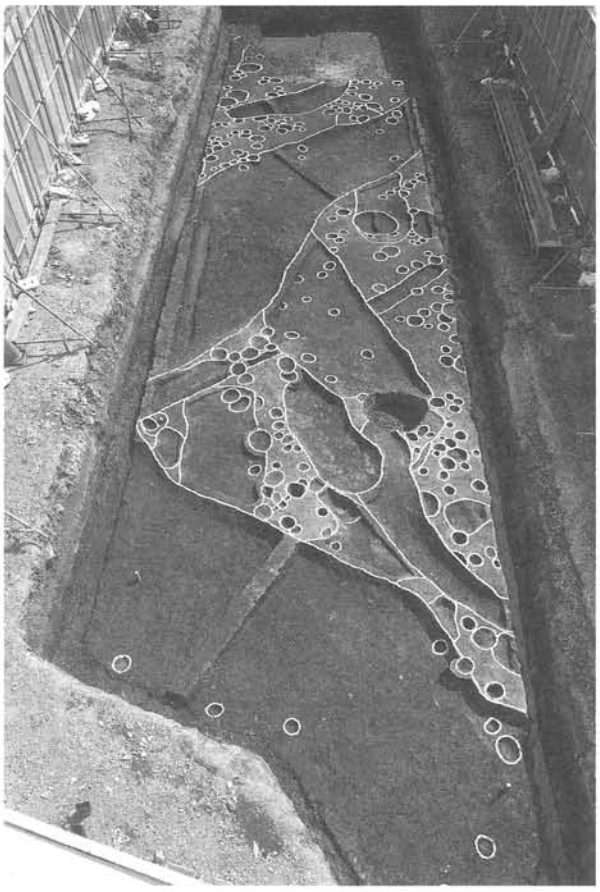
ＳＤ－15は、その推定位置の上部に、現用の水路があるため、調査区北端部で一部を検出したのみである。ＳＤ－14と同規模の溝と思われ、埋土内より弥生時代中期の土器片が出土したが、詳細は不明である。

ＳＤ－13は、ＳＤ－16とＳＤ－14の間を南北に流れる小規模の溝である。幅1.3ｍ、深さ0.1～0.25ｍを測る。埋土は単一で、弥生時代中期の摩滅した土器片が出土した。

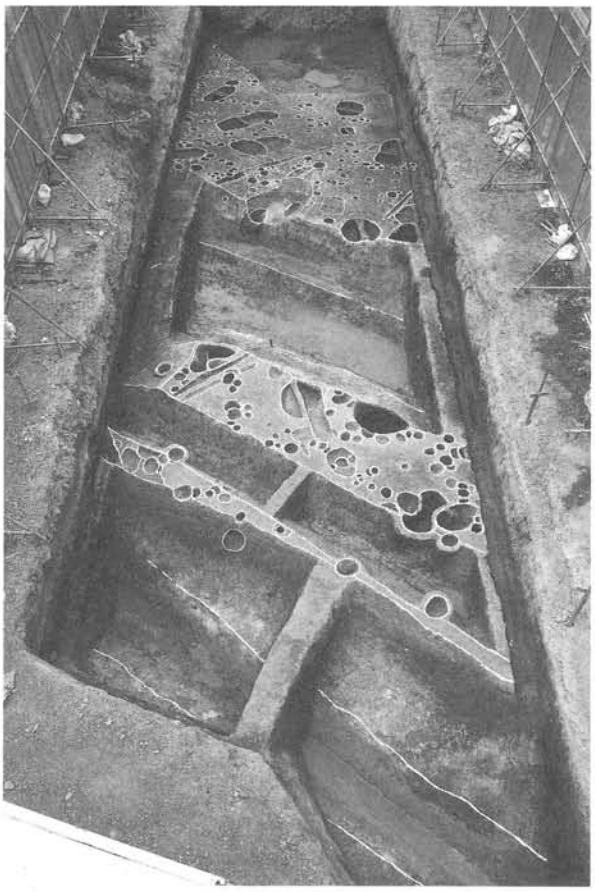
遺物総量は、整理箱で４箱である。そのほとんどが、流路内から出土した弥生時代中期～後期の摩滅した土器片である。他に、検出面およびその上層で出土した古墳時代前期の土師器片や同後期頃の土師器・須恵器片などがある。

まとめ

東奈良遺跡では、集落を廻る環濠、もしくはその可能性のある溝が、11条ほど確認されている。弥生時代前期、同中期、そして同後期から古墳時代前期初頭の大小の溝が、同心円状に廻っており、集落規模の拡大過程を示している。北側調査区で検出された３条の環濠は、最も内側を廻る弥生時代前期の一群に該当する。その構築は、当地では内側のＳＤ－05が早く、ＳＤ－06・07が



北側調査区第２面



北側調査区第３面

第49・50図

これに続くと考えられるが、いずれも早い段階で埋没が始まり、弥生時代中期には、完全に廃絶されている。この３条の環濠で囲まれた集落中心部は、直径80ｍほどの範囲で、その平面形は、円形というより、隅丸でやや歪な方形といえる形状を呈している。

南側調査区は、北側調査区に較べて極端な比高差はないものの、谷地形肩部にあたり、流路が集中する地区であったと判断される。流路は、古墳時代前期頃まで、改修されながら存続していたが、同後期頃には削平・整地され、湿地状態から耕作地へと転化されていったものと推測される。

牟礼遺跡

所在地　茨木市舟木町373-3・5・6

開発事業　共同住宅建設事業

調査期間　平成15年7月24日～平成15年9月16日

調査面積　871㎡

調査担当　宮脇　薫

調査結果

今回の調査地は安威川の右岸に位置している。

基本土層は、耕土、床土の下層に明黄色砂質土、灰色粘土層が堆積している。その下層に約15～20cmの包含層の褐色土が堆積している。包含層には弥生土器、土師器、須恵器が含まれており、遺構は黄青色土、灰色土の2層で検出された。

第Ⅰ遺構面

第Ⅰ遺構面で検出された遺構は、柱跡、溝、土坑である。

柱跡は径が40～55cm、20～30cmの円形及び楕円形のものである。深さは5～10cmと浅い。柱穴からの遺物はいずれも小片であり、明確な時期は不明である。柵、堀立柱建物としては捉えられなかった。

溝が11条検出されたが、いずれも幅が22～30cm、深さが5～7cmと小規模である。溝－Ⅰ・Ⅱ・Ⅲは南北方向に検出され、南で途切れた状態で検出された。出土した遺物は古墳時代後期～奈良時代の須恵器、土師器の小片であり、明確な時期は不明である。溝－Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・ⅠX は東西方向に途切れた状態で検出された。出土した遺物は、古墳時代後期～奈良時代の須恵器・土師器である。溝－X・XⅠは直交する状態で検出された。遺物はなかった。

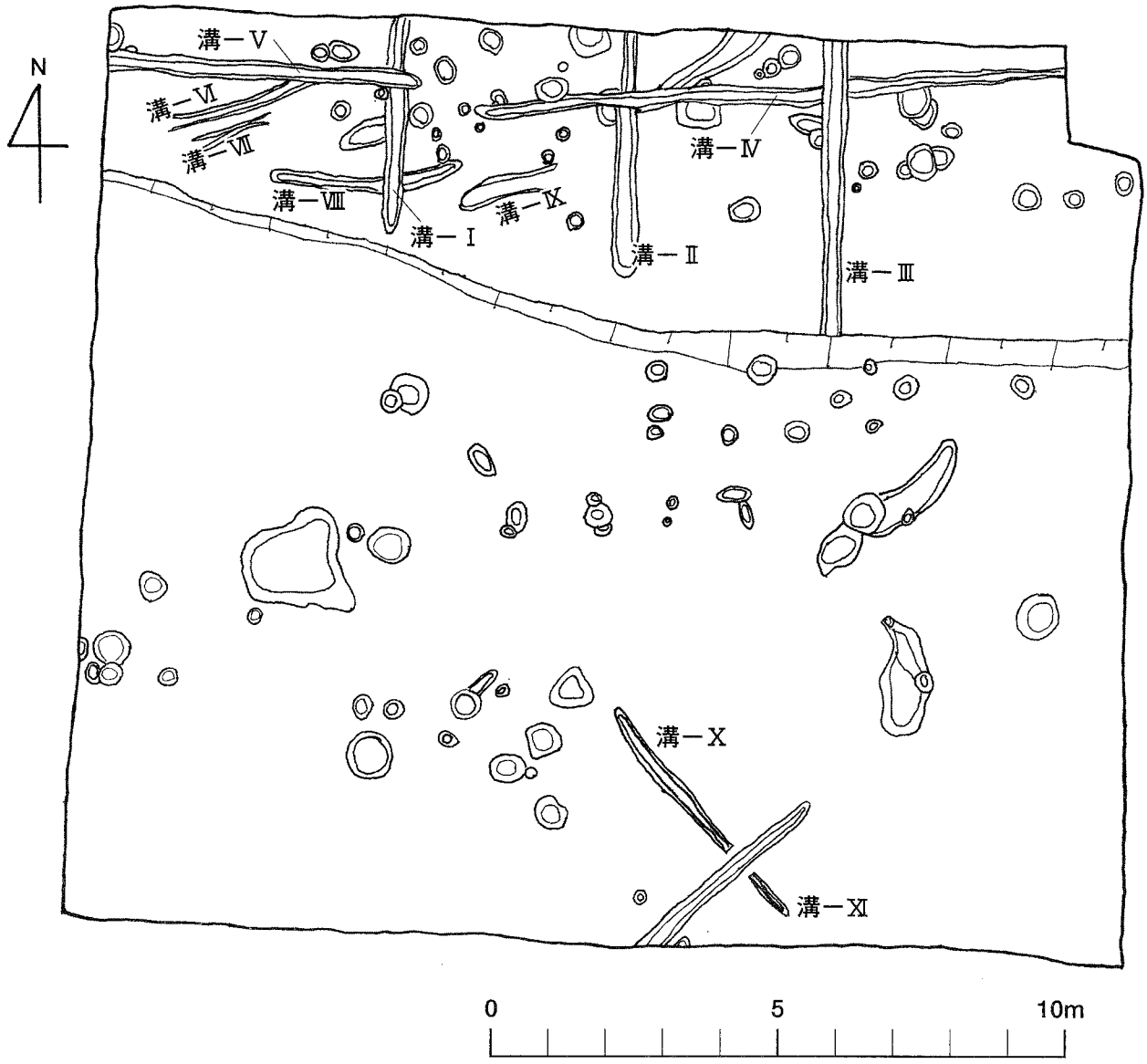
土坑は短辺が92cm、長辺が1m92cmの方形で、深さは7～8cmである。7世紀前半の須恵器、土師器の破片が出土した。

第Ⅱ遺構面

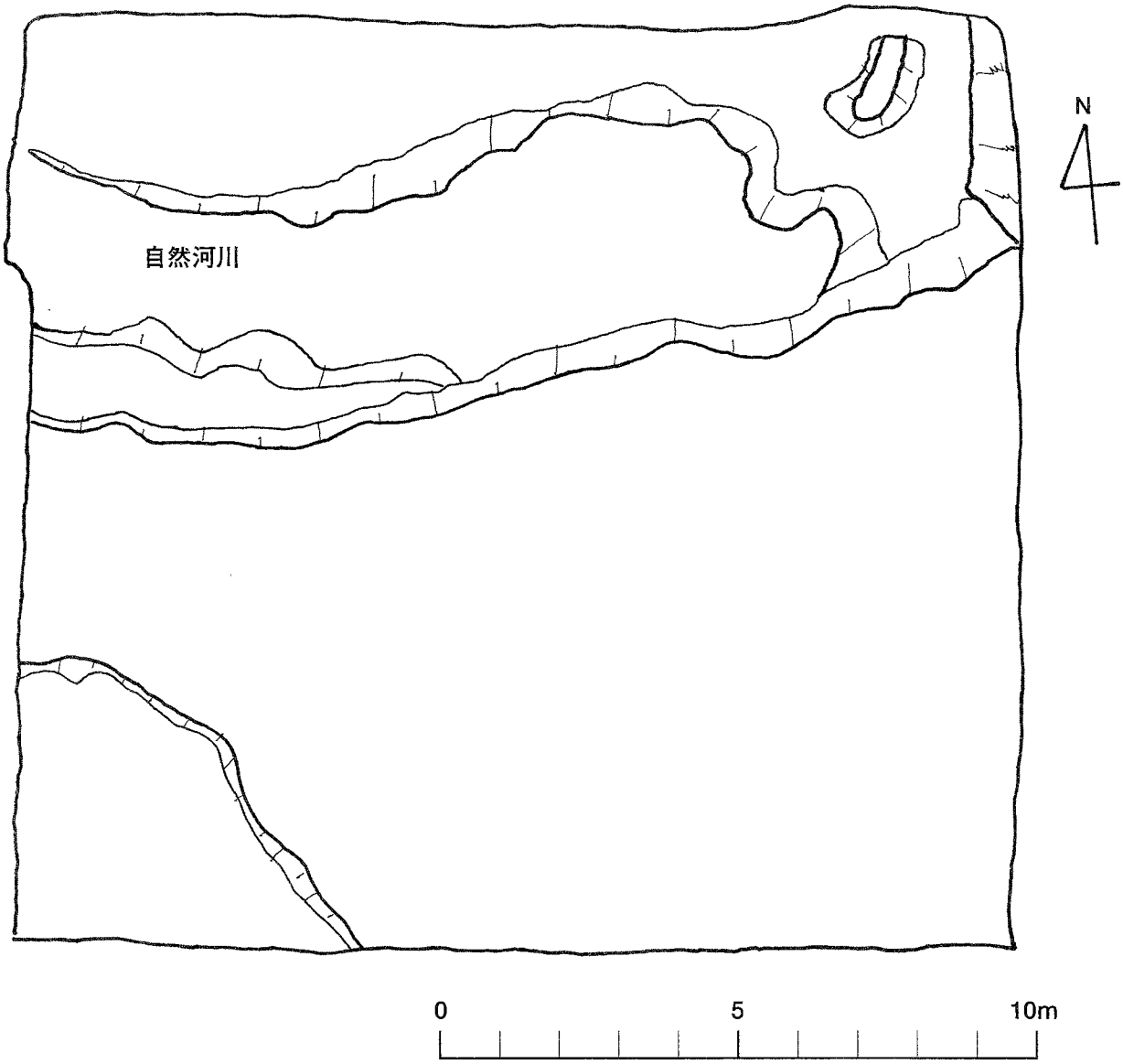
第Ⅱ遺構面で検出された遺構は、調査区の北半で一部検出された自然河川のみである。幅が7m50cm、深さが80cmである。河川内より摩滅した弥生土器とみられる土器片が5点出土した。

まとめ

今回の調査によって、付近に古墳時代後期から奈良時代の集落が存在したことが確認できた。

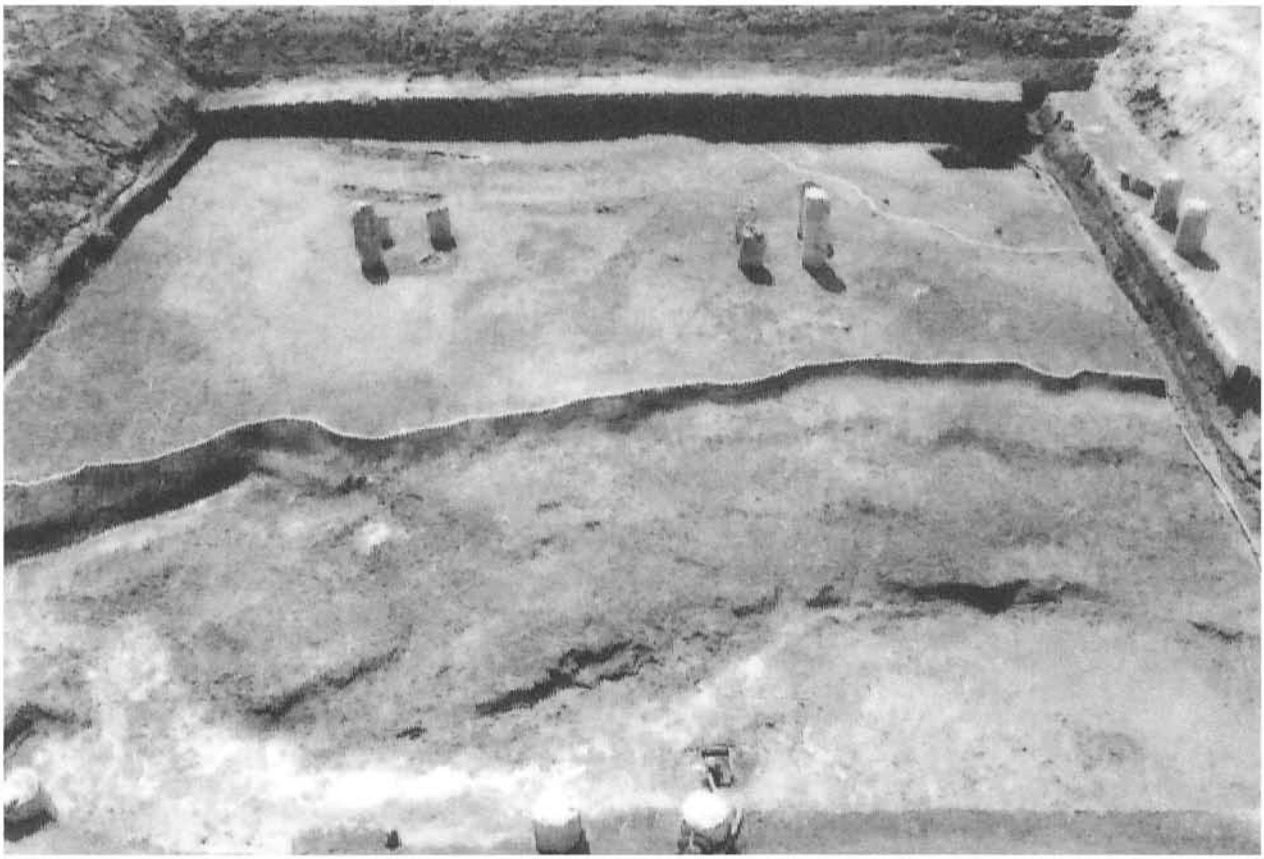


第44図　牟礼遺跡遺構図（第Ⅰ遺構面）



第45図　牟礼遺跡遺構図（第Ⅱ遺構面）

第46図　牟礼遺跡調査区全景（第Ⅰ遺構面）



第47図　牟礼遺跡調査区全景（第Ⅱ遺構面）

目 垣 遺 跡

所 在 地　茨木市目垣三丁目244-3
開発事業　携帯基地局建設事業
調査期間　平成15年７月28日
調査面積　10㎡
調査担当　黒須　靖之
調査結果

目垣遺跡は茨木市南東端部の沖積地に位置し、遺跡発見の経緯は昭和48年の送電線用の鉄塔設置に伴う確認調査で、黒色粘土の遺物包含層が検出され、弥生時代前期～中期にかけての遺物が出土したことが始まりである。現在は遺跡の範囲が約南北530ｍ、東西300ｍで、弥生時代～中世にかけての複合遺跡として周知されている。近年では、平成９年度、10年度、11年度に本発掘調査が実施され、弥生時代中期（Ⅱ～Ⅲ様式）の溝や柱穴等が検出された。このことから当該地域は弥生時代中期の集落域と推察された。 今回の調査区は、遺跡のほぼ中央東端に位置しており、携帯基地局を建設するため事前に発掘調査を実施したものである。試掘調査は平成15年７月18日、本調査が平成15年７月28日である。

基本層序

調査区の基本層序はⅠ層からⅤ層まで大別される。Ⅰ層ー表土（0.5～0.7ｍ）、Ⅱ層ーにぶい黄褐色砂礫（0.2ｍ）、Ⅲ層ー灰白色粘土（0.2ｍ）、Ⅳ層ー褐灰色粘土（0.25ｍ）、Ⅴ層ー黒褐色粘土（0.3ｍ）で古墳時代初頭の遺物包含層である。

遺構・遺物

遺物を伴うⅤ層（黒褐色粘土）は植物遺体とカーボンを多く含んだ層で、溝等の埋土の可能性も考えられる。出土した遺物は古墳時代初頭頃のもので、甕の口縁部４点、平底の底部２点、タタキ痕のついた体部がある。口縁は端部をつまんだもの、くの字で端部が丸いもの、内湾気味に大きく開くものがある。弥生時代後期の甕の系譜を引き継いだⅤ様式甕と思われる。この地域において、古墳時代初頭の遺物は未発見であったことから、当該期の集落が付近に存在する可能性が考えられる。

調査地位置図（目垣遺跡）

第51図　調査区全体図（目垣遺跡）

4. 調査地近景
（西から）

5. 調査区全景
（北西から）

6. 調査区断面
（北西から）

第52図

目 垣 遺 跡

所 在 地　茨木市目垣三丁目135-１・２

開発事業　事務所付住宅建設事業

調査期間　平成15年12月２日～平成15年12月９日

調査面積　43㎡

調査担当　宮脇　薫

調査結果

今回の調査地は安威川の左岸にあり、目垣遺跡の北西端に位置している。対岸の右岸には溝咋遺跡がある。

基本土層は、耕土、床土、下層に黄濁色砂が約15㎝、青灰色粘土が約55㎝、灰色砂が約25㎝で無遺物層が堆積している。その下層に包含層である暗灰色土が堆積している。包含層には弥生時代中期～後期の土器が含まれている。

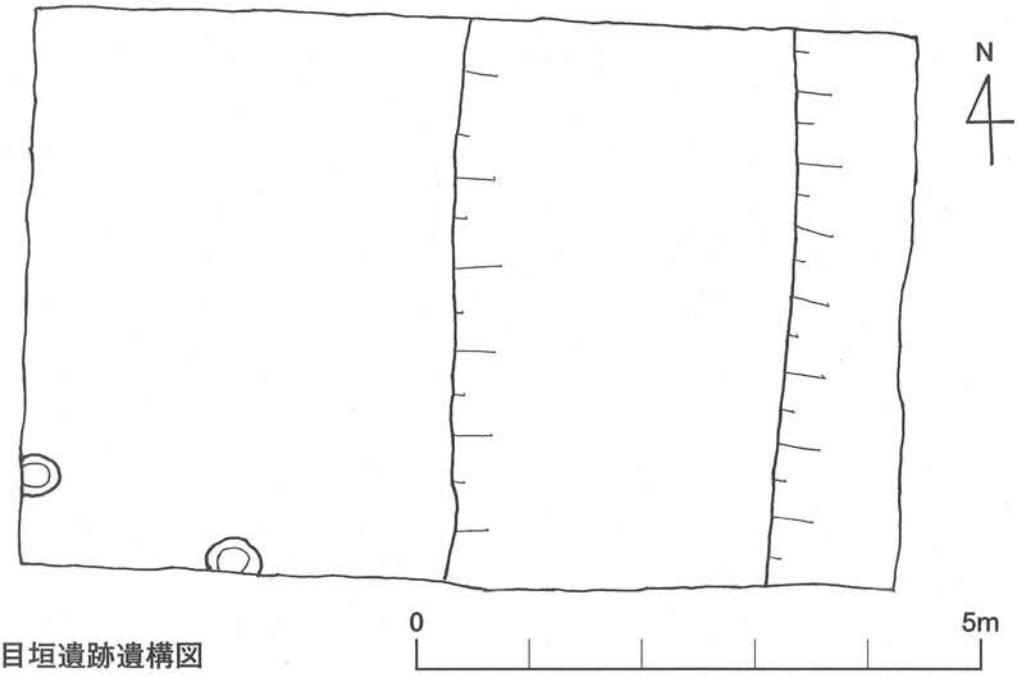
遺構は明黄色土において検出された。

検出された遺構は、柱跡２基及び溝１条である。

溝は調査区が狭く溝の右岸のみが表れていて、幅は1.72ｍ、深さは60㎝であり、堤は２段の階段状で検出された。溝内からは弥生時代後期（畿内第Ⅴ様式）の土器が出土している。

柱跡はいずれも径が約14㎝の小型であり、遺物はなかった。

当該地は目垣遺跡の西北端であり、平成９年や平成10年の発掘で調査された北東の箇所に連なる弥生時代後期の集落域が、この調査地にも広がっているものと考えられる。



第53図　目垣遺跡遺構図

平成15年度発掘調査概報

発行日　平成16年3月31日
発　行　茨木市教育委員会
印刷所　株式会社　トゥユー